
ETERNAL CHILDREN ~ 永遠の子供達 ~

ラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ETERNAL CHILDREN ～永遠の子供達～

【Nコード】

N9709Z

【作者名】

ラサ

【あらすじ】

遠い未来、人類のほとんどが滅びを迎えた中、日本で唯一生き残った人間達の物語。人類の滅亡を防ぐために科学者シイナは閉鎖された空間「ドーム」で特別な少女マナを育て上げた。しかし、マナはかつて実験体として処分したはずのアルビノの少年ユウによってさらわれてしまう。

人類の滅亡を受け入れられないシイナの計画には、マナはどうしても必要だった。そして、マナをさらったユウにも、マナはどうしても必要だった…

逃げ場のない未来に取り残され、
翻弄される人間達がたどり着く先
は、希望か、それとも絶望か。

01（前書き）

内容はなんちゃってSFですが、少々ハードな展開や部分もあるので、お読みになる際は注意が必要です。

その部屋に、窓はなかった。

外部からの有害なものを全て遮断するよう作られたためである。空調の行き届いた完璧な空間に、換気としての役割を担う必要はなかった。

だが、観賞としての役割を補う代わりに、部屋の側面にはスクリーンパネルが窓を似せて張り巡らされ、外の景色を投影するようになっていた。もちろん、好みの景色に切り変えることも可能である。「綺麗ね——」

マナは無意識にそう呟いていた。

今彼女が見ているものは、そこに本当の窓が存在したならばそのままに映る、青い空だった。明るさを含んだ青に、はつきりとした大きな白い雲が形を変えながら流れていく。

このスクリーンから見る外界の景色を、マナはとても気に入っていた。それは、彼女の瞳がじかに見るこのない、決して触れることも感じることもないものだからだ。

マナの知っている世界は、この白い壁の中だけだ。彼女は太陽の光の下に立ったこともなければ、暗闇を照らす月光も、星の瞬きも見ることがない。草の間を抜けていく風に吹かれたこともなければ、柔らかな地面の感触も知らなかった。

識ることはあっても、感じることはない。

それがマナの全てだった。

「本当の風って、どんなものなのかしら。あんなに草を揺らして、もしそこにいたら、どんな感じがするのかしら」

最近、マナはよくそんな感慨に囚われる。この白い壁の向こうの、まだ本当に見たことのない世界へ出ていきたいと。

自分を育ててくれた優しいシイナは、外は人間の生きていけるところではないと教えてくれた。太陽が沈んで、一夜明ける前に、人

間は自然のもたらす暗闇の恐ろしさに耐え切れずに発狂しているのだと。実際にそれを試して、発狂して死んでしまった人間がいたということも記録に残っていると。

それを聞かされた時、幼いマナは泣いてしばらくは明かりを消して眠ることはできなかった。そして、太陽が沈んだ後の外の様子を見ることは、生まれてから十四年間、一度もなかった。

それでも、マナは外界に対する憧れを止めることはできなかった。スクリーンに映る外界の景色は穏やかな雰囲気を漂わせ、いつも以上に彼女の憧憬をかきたててやまない。

「——そうよ。太陽が沈むまでなら、いいんじゃないかしら。今度博士の機嫌がいい時に頼んでみよう」

マナがそんな風に心を飛ばしている間に、オートドアが開き、静かに部屋へ入ってきた人物がいた。

「マナ。もう時間よ。いらっしやい」

自分の名を呼ぶ声に、マナは振り返った。

「博士」

マナを呼んだのは、二十代後半の美しい女性だ。マナの育ての親とも言える。色素の薄い髪は襟足にとどくほどで切られて、少々男性的な感を与えている。年齢よりは若く見えるその面差しは、些か感情に乏しく、冷やかな美貌を際立たせていた。

対照的に、マナは腰までとどく黒髪を揺らして、少女らしいあどけない笑顔で、シイナのもとへとかけよる。大きな瞳が印象的に映るあどけない顔立ちは、無邪気さもそのまま表わしていた。

自分より大きなシイナを見上げるマナは、時には冷酷とさえ見えるその美貌が、自分に向けられるときは暖かく慈愛の深いものになるのを知っていた。透き通るような、感情に乏しい声も優しく響く。マナは母親に対する愛情を知らないが、劣らぬ想いでシイナを愛していた。この閉ざされた世界に存在する数少ない人間の中で、唯一彼女だけが同性であったことも、その理由と言えよう。

「博士、今日は何か起こりそうな気がするの。とても、不思議なこ

と」

「まあ。マナには隠し事はできないわ。何でもお見通しなのね」

「どうしたの、博士。何かあったの？」

好奇心を隠さずに、マナはシイナの腕に絡みついた。

「そうね。 学習 が終わったら教えてあげるわ」

「何なの、博士。隠さないで教えて」

「それは見てのお楽しみよ。さあ。行きましょう」

二人は部屋を出て、大きく緩やかな弧を描く長い廊下を歩いた。

この科学技術の粋を懲らして造られた建造物——ソーラーパネルで外面を覆った半球のドーム——が、マナの世界の全てだった。

地下十階の更に奥の最下層に動力維持のための設備を据え、底部の中心点からは頂点へとエレベーター八台を据えている。

内部は、一階をホールと倉庫にして、二階から十階までをケーキを配分するように均等に四区域に分けており、管理、研究、居住、生産と、それぞれの機能別に各技術者によって統制されている。各区域は偶数階ごとに全ての区域と通じるようになってはいるが、それぞれの職種に応じて立入が厳しく規制されている。

今、マナとシイナがいるのは研究区域である。シイナはこの区域の責任者でもあった。

マナはこのドームの構造を知識として理解していたが、実際に彼女が知っているのは、研究と居住区域のごく一部分だけだった。

だが、マナにはそれが苦にはならない。それは知る必要のないことだからだ。

マナは選ばれた人間なのだ。だから、それ以外は何も重要なことではない。そう、教えられてきた。

今も彼女は、何も知らずにシイナに連れられて、居住区の自分の部屋から平行に移動し、研究区二階の学習部屋へと移動している。

研究区の三階から五階分までは存在しない。その空間は、床をぶちぬいて造った植物用の大きな温室となっており、エレベーターへ向かう直線の廊下側面は特殊コーティングを施したガラスが張り巡

らされていた。

マナとシイナが向かうその先で、長身の青年が、ガラスの向こうの実験用植物の温室を眺めている。

初めに彼に気づいたのは、マナだった。続いて、シイナも気づき、二人は立ち止まった。

「――」

マナはじつと彼を見つめた。見たことのない男性で、シイナと同じくらいの年代だということはわかった。視線に気づいたかのように青年は振り返る。しかし、そこには何の感情の揺らぎも見えない。遅い、または、男らしい、そんな形容を、青年は持ち合わせてはいなかった。すらりと痩せて、華奢なようにも見える、美しい、だがどこか退廃的な翳りを漂わせる青年だった。

「やあ、シイナ」

声をかけられたシイナは、無表情に青年を見ている。

「部屋で待つようにと伝えておいたわ。なぜ廊下に？」

「ああ。退屈だったからね。温室を見ていたんだ」

言いながら、初めて彼はマナに目を向けた。興味深げな眼差しで。

「君が、マナかい？」

「ええ」

「はじめまして。君の 夫 になるフジオミだ」

優しく微笑う長身のフジオミを、マナは驚いて見上げた。表情を見せると、途端に先程の退廃的な名残は消え失せ、人懐こい和らかな印象になる。

「まあ、あなたがあたしの 旦那様 なの。はじめまして、あなた。マナと呼んでください。お風呂になさいます？ それともお食事が先ですか？」

「は？」

突然の、わけのわからない発言に戸惑うフジオミに、マナの背後でシイナが噴きだした。

「どういう教育をしたんだい、君は」

「マナは今、歴史で『家族』について学んでいるのよ。古い創作書が教科ディスクなの。少し間違った概念を持っていても大目に見てあげて」

「——まあ、いいけれどね」

肩を竦めるフジオミに構わず、シイナはマナに視線を向けた。

「さあ、マナ。残念だけど、もう勉強の時間よ。行きなさい」

「でも博士。あたし、まだフジオミといたいわ。お話したいの」

「学習 が終わったらいいわ。今日はそれで終わりよ。レストルームで待っているわ。いいわね」

「——はい」

膨れた顔をしながら、それでもマナは頷いた。こういうとき、シイナは決して譲らない。そして、約束を破ることも決してないのだ。廊下を駆けて曲がり角まで来たとき、マナはそっと立ち止まり、振り返った。

「——」

シイナとフジオミは何か話をしているようだった。マナには気づいていない。もう一度、マナはじつとフジオミを見つめた。

「彼が、あたしの 伴侶 になる人なのね」

ほうつ、と、息をついてマナは笑った。

「すごく素敵。優しそうだし。よかった」

話には聞いていたのだ。夫 となるフジオミのことは。

だが、マナはそれまで一度もフジオミに会ったことはなかった。

否、シイナ以外の人間と、彼女は接触したことはこれまでになかった。シイナ以外ここにいるのは、みんなドームを維持するためにオリジナルである人間から複製された、クローン体ばかりなのだ。

初めて見る、自分と同じ立場の異性であるフジオミに、マナの興味は尽きない。

じつとシイナとフジオミを見ているマナに、しかし、彼らのほうが気づいた。

マナは驚いたように振り返ったシイナに手を振ると、予定された

今日の 学習 を終えるために学習室へと向かった。

「どういづつもり？」

マナがいたときとはがらりと変わった、突放すような口調。シイナは苛立たしさを隠さずにフジオミを振り返り、見据えた。

視線を受けとめるフジオミは、さほど気にしたふうもない。まるでなれっこだとでも言いたげに。

「まだマナの 教育 は済んでいないわ。計画が完全に終わってもないし、あなたのことを事前に説明する間もなかった。あの子はこちらが驚くほど勘が良すぎるの。余計な刺激を与えられては困るのよ。一体どういづつもりなの！？」

強い口調に、フジオミは微笑した。

「いいのかい、マナが見てるよ」

シイナが振り返ると、慌てたように手を振り、すぐに少女は消えた。小さく舌打ちして、シイナはフジオミに向き直る。

「私の質問にまだ答えていないわよ」

「君は確かにこの計画の責任者だが、あくまでもそれは名目上にすぎないということさ。カタオカにも、僕を拘束することはできないしね」

カタオカとは彼等の議長で、現存する二つのドームを統括する、彼らの社会の実質的な指導者でもある。

だが、指導者は存在しても、独裁はなかった。完全な権利をもつ人間の数が少ないために、直接民主制なのだ。この社会での決定権を持つものは、クローンではない人間。彼等は全て議員となり、指導者の下、議会を召集し、決議する。議会の承認を得なければ、何も事が運ばないようになっている。それは、かつての彼等の世界にあった政策の名残だった。

だが、何事にも特権がある。フジオミもまた、特権を持つべき人間であった。

「しばらくはここにいる。部屋の用意はさせてあるから不都合はないよ」

「また勝手に話を通したのね！ 私に何の断りもなく」

「じゃあ、許可を」

フジオミは言う。

「今、許可をくれ。君が許してくれば、それですむ」

「――」

その口調は、拒否されることを全く念頭においていないようにも聞こえた。

フジオミはもう一度繰り返す。

「シイナ、許可を」

シイナは強く唇を噛んだ。

「――好きにすればいいわ。私よりあなたに決定する権利があるのだから」

「結構」

シイナの反応を楽しむように、フジオミは微笑った。彼に対する憎悪に近い感情がわいたが、辛うじて、シイナはそれを表情に出さずにすんだ。

「なぜここへ来たの。あなたはこの計画に乗り気ではなかったはずよ」

きつい口調にフジオミは軽く肩を竦める。

「君に会いたかったからだと言ったら？」

シイナは表情を変えることもなく、じっとフジオミを見つめた。

それ以外、何の反応もない。

あきらめて、フジオミは吐息をついた。冗談の通じないことはわかっているらしい。

「――正直なところ、考えが変わったのさ」

「考え？」

「ああ。食わず嫌いはやめることにするよ。相手を知らなきゃ、好きになりようもないだろ。なるべくなら、相手にもいやな思いはさ

せたくないしね」

シイナは、侮蔑の感を隠さずに嗤った。

「あなたに、相手を思いやる気持ちがあるというの？ 自分のことにしか興味がないくせに。あなたにとって重要なのは、自分の楽しみだけでしょくに」

だが、シイナの言葉にも、フジオミは気にしたふうもなく頷いた。それが事実であることを、彼自身が認めていた。

「だからこそ、楽しめるよう努力するのさ。せめて自分が不快にならない程度にね」

永い歴史の中で、今、人という種が滅びを迎えようとしていた。

原因はわからなかった。ただ、徐々に人間から、生殖能力が奪われていった。それがどの種族にも平等に訪れたことは、大いなる運命であつたのかもしれない。

半世紀ほど前に、人類のほとんどは地球上から消え去つたと推測される。最初に、陸続きであるユーラシア、アフリカ大陸に住む人間が死に絶えた。なぜか死は、感染するかのように広大な大陸にいる人々に襲いかかつていったのだ。

そうして、オーストラリア、アメリカ両大陸に住む人々も相次いで死に絶えた。

かつて『日本』と呼ばれた経済大国は、辛うじて現在までは生き長らえた。だが、彼らを絶滅から救つたのは、島国であつたということだけが原因ではなかった。

人類の滅亡が戦争や災害ではなく、生殖能力の衰えによつてもたらされると発表されてから、世界は恐慌状態に陥つた。日本も例外ではない。それ以前からの著しい人口の激減により、日本人の総数は、全盛期の半数にも満たなかつたという。それでも、他国からの移住や帰化を特例としてしか認めなかつたこの国は、自らの滅びは己れの国だけで迎えることを選んだのだ。

彼等の社会を支える支柱となつたのは学者達だつた。生物学、遺伝子工学、人類学その他の専門的な知識を持つ者達が来たるべき時に備えて日本社会を根本から覆した。

いわゆる、鎖国状態に入つたのである。

科学技術の粋をこらしてドームという完全なる閉鎖空間を作り出し、外部からの接触をいっさい排除した。

その当時では、己れのことには手いっぱいだった他国は、どこもこの小さな島国に関心を持たなかった。もちろん国内での反対もあったが、元来己れの国以外を排除しがちな状況であっただけに、強行突破されてしまえば、人々は意外にすんなりとその対策を受け入れ始めていった。

ただ、前回と違うのはどの国との交渉も完全に断ったということだ。

その頃までには、彼らはあらゆる弊害を克服していた。

人口の減少に加えて、完全自給自足がなったこの小さな島国は、ただ自分達の血脈が永遠に生き続けることだけを考えればよかったのだ。

だが、いかなる高度な技術をもつてしても、生命の領域を支配することはできなかった。

現在、この島に存在する人間は、登録上で二百人たらず。ただし、純粋な人間は、その四分の一にも満たない。そのほとんどは、クローニングによる複製体であった。そして、複製体のほとんどは、世代を重ねるごとに生殖能力をもたずに産まれるようになった。

クローンは、もはや人間とははつきりと区別されており、労働用として扱われている。

生殖能力を失いながら細々と続く人間が終わりを迎えていく一方で、彼らはクローニングによる技術を駆使して、彼らの社会を保ち続けた。その奇妙な形態こそが、彼らの未来をねじまげていくことも気づかぬまま。

ねじまげられた未来にかりうじて生き残る人間達。

それが幸か不幸かは、彼ら自身にさえ、すでにわからなくなっていた。

突然のエマージェンシー。

この時、学習を終えたマナを迎えて、フジオミとシイナは研究区のレストルームでコーヒーを飲みながら休息を取っていた。初め、三人は驚いたものの、ちよつとしたミスだろうと深刻には考えなかった。

だが、一分を過ぎてもやまない警報に、徐々に彼等の内に奇妙な不安が沸き上がる。

「何が起こったんだ？」

「わからない。事故かもしれない。ここから動かないほうがいいわ。管理区域に通信しましょう」

シイナが、机上のコンソールで管理区域への通信を始める。数秒してスクリーンとは違う壁面の大きなモニターに、クローン体の職員の様子が現われる。

「何があつたの？」

『侵入者です。何者かがラボの通風口から侵入しました』

その耳慣れない言葉に、マナが息をのみ、フジオミが問い返す。

「侵入者？ そんなものが、外から来たって言うのか。馬鹿なことを言わないでくれ」

何処かのんびりした問いにも、無理はなかった。自分達を取り巻くこの世界に、外敵がいようはずもない。彼らはそれを事実として知っていたのだ。

『ほ、本当なんです。そちらに向かっています。早急に退避してください』

「動物じゃないのか。ある程度知能があれば、通風口に入り込むこともある」

「生体反応を確認したの！？ 監視モニターが捕えたものをこつちにまわしなさい、はやく！！」

苛立たしげにシイナが叫ぶ。

モニターが切り変わり、侵入者の姿を映しだした。

「！！」

その瞬間、モニターのディスプレイに大きな木製のテーブルが投げつけられた。同時にスクリーンの風景が消え、窓のない部屋は人工燈の明かりだけが浮き彫りになる。

「きゃあ！！」

マナの悲鳴。

モニターに氣をとられていたシイナとフジオミが振り返る。

「――」

薄暗い視界の中、ぐったりとしたマナを抱きあげている者に、フジオミは愕然とした。それは、未だかつて彼が目にしたことのない、不思議な容姿だった。

抜けるような白い肌。銀系のような髪。見据える瞳は薄闇でもそれとわかる、炎のような赤だった。マナと同じくらいの少年だ。声も出せずに、フジオミはその少年を凝視していた。

「ユウ！！」

シイナが叫んだ。

それがフジオミにさらなる驚愕を与える。今、シイナは少年の名前を呼んだ。彼女は彼を知っているのだ。

赤い瞳が鋭くシイナを睨んだ。だが、すぐに踵を返して部屋を出ていった。マナを抱いたまま。

「待ちなさい！！ マナをどうする気！！」

シイナが後を追う。フジオミが数秒遅れて続く。マナ一人を抱えているというのに、少年の速さは二人を凌いでいた。

「シイナ、君はあの子を知っているのか？ 何だ、あの異様な姿は――」

シイナは彼を見ようとしめない。ただ前だけを見つめていた。そ

の顔色は心なしに青ざめていた。

「実験体よ。まだ生きていたなんて——」

忌ま忌ましがな呟き。走りざまに、シイナは廊下に備え付けられた非常時用のエマージェンシーコールをメインコンピュータに送り込む。彼らの前後で、両脇の壁から出てきた扉が廊下を仕切っている。

彼らの前の通路も仕切られていくが、シイナは手慣れた手つきで扉につけられたコンピュータパネルを操作し、前へ進む。

フジオミはシイナに従い、ユウと呼ばれた少年とマナを追うが、途中奇妙なことに気づく。

非常時には、通路を仕切る全ての扉とエレベータは自動的にロックされ、特別なコードでなければ開かないようになっている。だが、最初の扉以降、シイナが開けるより前に開かれた扉は、壊したふうもなく、真つすぐに非常階段へと向かっている。内部構造に詳しくなければ、こんなことはできない。

これは事実だ。

明らかにあの少年はここを熟知している。

シイナは少年を実験体だと言った。

（しかし、一体何のだ。なぜ、そんな少年が、よりもよって外からやってきたんだ？）

このドームを離れては、我々人類は生きられないというのに。そんな疑問が頭の中を駆け巡る。

普段はめつたに使わない非常階段をかけおり、シイナとフジオミは一階を目指した。

一人で逃げるのとはわけが違う。少年はマナを連れている。出ていくとしたら、入ってきた通風口からは不可能だ。

そして、それ以前にシイナはよくわかっていた。

（これは報復だ。自分に対する）

だからこうして、追ってこいとも言わんばかりに逃げている。一階へ着くと、奇妙な騒めきに満ちていた。外へ通じる扉の前に

は、少年がいる。そして、作業員であるクローン達は、それを遠まきに見ているだけ。無理もない。誰もこんな事態を予想だにしていなかったのだから。

「マナに傷一つでもつけたら許さないわ!!」

シイナの叫びにも少年は無言だった。信じられないことに、ロックされたはずの扉を手も触れずに開け、外へ消えた。

「マナ!!」

シイナが開け放たれた扉へとかけよる。吹きつける風は一瞬奇妙な渦を描いたが、すぐに止まった。

「――」

そして整備された敷地の遥か彼方の草地にすら、シイナとフジオミは二人の姿を見つけることはできなかった。

「なんてことなの…マナがさらわれるなんて…」

ひっきりなしに届く不快な音が、覚醒とともに大きくなっていく。それはマナにとっては、紙が散らばる音に聞こえた。たくさんの紙が、床に落ちていく音。心の何処かで、それは違うとも思っていたが、他に思い当る音を知らなかった。そんな音を聞きながら、マナはゆっくりと瞳を開けた。

「――」
始めに視界に映ったのは、薄暗い天井の壁だった。

光の明度も彩度も、マナが今まで見たことのないものだった。まだ夢を見ているのかもしれない。そう、マナは感じた。何故、こんなに暗いのだろう。さっきまで、あんなにも明るかったのに。

二、三度瞬きをしても、マナに視界の光の加減は変わらなかった。だが、背中にあたる、ベッドの感触が違う。体に触れているシーツの感触も。

奇妙な違和感が、徐々にマナの意識を覚醒させていく。

（何かが違う）

五感の全てが、訴えかけていた。

マナは飛び起きた。

そして、視界にその少年を見いだして驚く。

「――」
見たこともない容姿だった。彼女が今までに見た人間やクローンは皆髪も瞳も黒かったのに。

だが、ここにいる少年は違う。銀の髪に赤い瞳。抜けるような白い肌を持っている。

「あなたは、誰？」

「ユウ」

低い声で、少年は名を告げた。端正な容姿は、まだ少し、少年らしいあどけなさを残している。

「ここは、どこ？」

「ドームの外だ」

「え！？」

「ドームの外だ」

繰り返し、少年は言った。それでも、マナはその言葉が信じられなかった。

さっきまで自分はドームにいたのだ。それなのに、どうして。

マナの思いを察してか、少年は身体を預けていた壁面の布から身体を離し、それをざっと横に引いた。

布のかけられていた壁にはそのままガラスをはめこんである。

この剥出しの作りは、何世紀か前の物だと彼女は確信する。

そしてその向こうには、彼女のまだ見たことのない世界が広がっていた。

「嘘……」

思わずベッドから立ち上がり、窓に駆け寄り、そのまま立ちすくむ。

薄闇よりも濃く影を落とす巨大な闇が見える。

それは全て前世紀の遺物だった。

かつては繁栄を極めただろう高く聳え断つ建造物は、今は見る影もなく廃れ、錆びれ、崩れかけている。今いるこの部屋も、それと同じ廃墟なのだろう。

宵の薄闇の中、聞いたことのない騒めきがひっきりなしに耳にこだまする。

窓の端に映る、外に蠢く巨大な影。

マナの恐怖はいよいよ高まる。

「いや…あたしを帰して。このままじゃ死んじゃう、ドームに帰して…」

「死ぬ？ あんた、病気なのか？」

訝しげにユウが問う。しゃがみこんだマナに、近づいてくる。

「いや、傍に来ないで…」

恐怖で、マナは混乱していた。

その眼差しを、少年は強ばったような青ざめた顔で見ていた。

「俺が恐いのか？ あんたたちとは違う姿だから、恐いのか？」

「――」

「でもこの姿は、俺が望んだものじゃない」

ユウは苦々しげに顔を歪めていたが、今のマナにはそんなことを思いやる余裕はなかった。

その時、一枚ドアの向こうで声がした。

ユウが振り返る。

マナはいよいよ身を竦める。

「ユウ、帰ってきたのかい」

「おじいちゃん」

ドアが片側だけ奇妙に斜めの角度で開いた。

部屋に入ってくる人物を見るなり、マナは悲鳴をあげた。

薄汚れた見慣れぬ型の長衣を身に纏い、長い杖を持った老人の姿は、マナの瞳には異様にしか見えなかった。髪は見事な白髪で、同じく白い髭が顔の下半分を覆い胸までとどいている。

「おやおや、嫌われてしまったようだの」

さほど気にしたふうもなく、老人は微笑った。微笑うとかすかに見える皺のある肌に、さらに深い皺が刻み込まれる。

だが、マナは顔を両手で覆ったまま震えている。

声を殺して泣いているようだった。

老人はその様子を眺め、それからユウに視線を向ける。

「ユウ、その子のお守りはおまえに任せることにしよう」

「おじいちゃん!!」

「私を当てにしていたのかい？ それは見当違いというものだよ。私は反対した。おまえは聞かなかった。おまえの行動は、おまえが責任をとりなさい。お休み」

ゆつくりと杖に体重を預け、老人はユウに背を向けて、来たときと同じに静かに部屋を出ていった。

ゆつくりと、ユウはマナを振り返った。

「マナ、泣くなよ。おじいちゃんは恐くない。優しい人だ。それに俺、あんたを殴ったりとか、そういうことしたりしないよ」

優しくかかる声。だが、マナは泣きじゃくったまま首を振り続ける。

「いや。いや。帰りたい。博士のところに、フジオミのところに帰りたい」

「マナ…」

自分にのびてきた手を気配で感じ、マナは心底怯え、身を竦ませた。両手で顔を隠し、少しでもこの恐怖から逃れる術を探した。

だが、震える身体は、やがて何の危害も与えられないことを訝しみ、恐る恐る顔をあげた。

ユウはそこから動かずに、じっとしていた。目が合うと、振り切るように視線を逸らす。

マナは、自分の反応に傷ついた顔をしたユウに、驚いた。

それは、高ぶっていた感情を落ち着かせるのに、十分だった。

涙が、いつのまにか止まった。

そのまましばらく、マナは少年を凝視し、少年は唇をきつく咬んだまま顔を背けていた。

彼は別に、危害を加える気ではないのだ。自分一人が恐がっているだけなのだ。そう理解すると、まだ少し恐怖は残ったが、心には余裕ができた。

ユウは動かない。

マナはゆつくりと立ち上がり、ユウのそばへと近づいた。実際に行動することで確かめると、今度は疑問が浮かぶ。

なぜ彼は、自分をここへ連れてきたのか。

「ユウ…？」

それでも、ユウはマナを見ようとはしなかった。

「俺はただ——」

ためらうような低いユウの声が、マナの心に素直に届いた。

「あんたと、話をしたかったんだ——」

「ユウ……」

ユウはとても淋しそうに見えた。

「ここには、あなたたちしかないの？」

「ああ」

では、無理もない。あんな奇妙な人物と二人だけなんて、自分になら耐えられない。

ひとりよがりな解釈を、マナはした。そう考えると、彼女はユウが可哀相になった。

「ひとりだったの？」

「ああ」

「淋しかったの？」

「ああ——」

ゆっくりと、マナはユウへ手をのばした。

ユウは動かなかった。

少し安心して、マナはユウの手を優しく握った。

ユウは、奇妙な顔つきでマナを凝視している。

マナはまた少し不安になったが、笑って言った。

「手をつないでいると、あたたかでしょう？ 具合が悪くなると、博士にこうしてもらったの。こうすると、淋しくないのよ」

促されて、ユウはマナの横に座った。手はつながれたままだ。

不思議なことに、触れた手から、波のように穏やかな感覚が伝わる。そんなことは、今までにはなかったが、それが逆に、マナを落

ち着かせた。

「あたし、まだ少しあなたが恐いの。だから優しくして。怒らないで。そうしてくれたら、あたし、あなたといっても恐くなくなると思うの。」

ユウは不思議そうな顔をしてマナを見つめた。

「——恐くなければ、俺といってくれるのか、マナ？」

「ええ」

「どうすれば、恐くない？」

真摯な眼差しを、ユウはマナに向けた。マナは少し戸惑った。

赤い瞳がじつとこちらを見つめている。見れば見るほど、ユウの容姿はマナには不思議なものに思える。

「——その瞳」

「え？」

「あなたの瞳で見ると、みんな赤く見えるのかしら？」

「——」

しばしの間をおいて、ユウは声をあげて笑った。その表情は歳相応にあどけなく、マナの恐怖心を残らず拭い去るには十分だった。

「ひ、ひどいわ。あたし、本気でそう思ったのに」

「じゃあ、マナの瞳は茶色いけど、みんな茶色に見えるのか？」

「ち、違うけど、でも、本当に、綺麗な赤だから——」

「綺麗？」

ユウは訝しげな表情でマナを見つめた。なぜそんなことを言うのかわからないといった表情だった。

「綺麗よ。濁ってない、本当に綺麗な赤。あたしも、こんな綺麗な色だったらよかったのに」

マナは顔を近づけて、じつとユウの瞳を覗き込んだ。

「ずっと昔には、もっとたくさんの人がいて、ここだけじゃない、海の向こうの別の大陸で生活していたんですって。その人達は、あたしとは違う種で、髪の色も瞳の色も違うの。金の髪や銀の髪、瞳の色は青や緑。あなたみたいな赤い瞳をしていた人も、きつといた

のね」

「マナは変わってる」

「変わってる？」

「誰も俺の髪や瞳のことは話さなかった」

「どうして？」

「俺がこの髪と瞳を嫌いだからさ」

「こんなに綺麗なのに？」

「そう面と向かって言ったのはマナだけだ。だからマナは変わってるのさ」

「綺麗なものは大好きよ。だから、ユウの髪も瞳も好きだわ」

膝の上に頭を預けて、マナはユウへ視線を向けた。

「どうしてかしら。さっきまで、あなたがとても恐かったの。でも、今は違う。何だか、初めて会った気がしないの。懐かしいような気が、するの。変ね。本当に、初めて会ったばかりなのに……」

話し疲れたのか、いつのまにかマナは微睡み始めていた。睡魔にまけて、目蓋が閉じられた。

「マナ？」

ユウはそつと名前を呼んだ。だが、返事はない。ユウはマナの顔を覗き込んだ。まだ幼い少女の寝顔に、ユウは苦痛に耐えるかのような表情を向けていた。

「――」

そうして、朝が来るまであどけない寝顔を見つめていた。

外が明るくなっていくのに気づくと、ユウはマナを起こさないように静かに抱き上げ、ベッドへと横たえた。そうして、そつと部屋を出た。

階段を下り、すぐの部屋をノックする。

返事はないが、ユウはドアを開けた。中に入ると開いたままの力ーテンから差し込む光で、すでに部屋は明るかった。

老人はベッドにはいなかった。窓に斜めに背を向けた揺り椅子に腰を下ろしていた。

ユウは黙ってそちらの方へと向かった。

目を閉じていても老人が起きていることに、気づいていた。

明けてゆく薄紫の中で、揺り椅子の軋む音だけが静かに響く。明るく照らされた老人の顔に、まだそう濃くならない影が優しく落ちた。

「おじいちゃん——」

「気がすんだかね」

ゆつくりと老人は目を開け、ユウに手を差し伸べた。

ユウは黙ってその手をとる。

「ごめん、おじいちゃん。俺、悪いことをしたよ」

「誰に対して、悪いと思っっているんだね？」

「——」

「ユウ、あの娘はおまえの望むものにはなれんよ。それを、忘れんようにな」

「わかってる——」

ユウは静かにその場に座り込んだ。

失われたものを求めるのがどんなに愚かなことが、ユウはすでに知っていた。

「でも、おじいちゃん。マナは、俺の手を優しく握ってくれたよ。

朝になるまで、そうしていてくれた」

「——」

「おじいちゃんと同じに、あたたかな、手をした……」

ずっと、欲しいものがあつたのだ。ずっとずっと、それだけが欲しくて。

「ちゃんとわかってるよ。子供じゃないもの。俺だってもう、わか
ってるんだ」

瞳を閉じて、ユウはそれきり動かなかった。老人は優しく、ユウの髪を撫でていた。

マナが目を覚ましたのは、太陽が顔を出してからだった。

いつのまにかベッドに横たえられていたことに気づき、起き上がるとまず窓へと向かう。

青い空に浮かぶ雲は、流れるように動いていく。

初めて迎える朝の明るさと、熱、光の強さは、皮膚に心地よい刺激を与えてくれた。

崩れた廃墟の群れから顔を出す巨大な樹木は濃い緑を風に揺らめかせていた。

「昨日の音は、これだったのね——」

木々の騒めきも、昨日と違って優しく耳に届いた。

地は足の長い草が一面覆い尽くし、風の方向を指し示し、靡いていた。

風に揺れるたびに微妙に色を変える緑達。

「ああ　なんて綺麗なのかしら……」

これまでになく、マナは眼に見える美しさというものを実感した。直に見る自然の景色に、これほどまでに感じるものがあるのだということも、彼女は知らなかったのだ。

もっと身近に、見て、感じてみたい。

思ってしまった、後は簡単だった。

やり方もわからない鍵も、試行錯誤で解いて窓を開ける。

一斉に風がマナの長い髪を後ろへと靡かせた。

「きゃ——」

その勢いに、思わず瞳を閉じる。

眼に見えない何かがぶつかってくるような、そんな突然の感覚だ

った。

強いだけの感覚は、やがて身を包むように穏やかで優しいものへと変わる。

マナは自分の髪が緩やかに背中に触れては離れるのを確認して、瞳を開けた。

剥出しの手が、風にさらされている。

開いた指の隙間を、風が抜けていく。

ただそれだけのことが、マナにとっては風に触れているという重大な現実だった。

風を感じていることも、全てが夢のようできて、けれども確かな現実なのだ。

こうしてここに立っていると、昨日までの自分のいたあの銀色のドームがいかにもつくりものめいた絵空事のようにも思える。

それほど、マナのこの体験は深い衝撃を彼女に与えたのだ。

「なんて綺麗なの。こんな世界が、あったなんて……」

チチチと、木々のざわめきの間から聞こえる音。

マナはどこかで聞いたことがあると思った。どこでだっただろう。ばさばさと、梢の間から飛び出したものを見て、マナは納得した。

「鳥　ね！　鳥のさえずりだわー！」

以前学習した教科テキストの中にあつた映像を思い出していた。

種類はもう覚えていないが、小さな可愛らしい鳴き声は、記憶の隅に残っていたのだ。

「なんていう鳥なのかしら」

聞いてみようと思つて、そこで、はたとマナは気づいた。

ユウがいない。

周囲を見回すと、奥のドアは開きっぱなしになっていた。

顔を出して覗いてみると、そこは長い廊下だった。

廊下の両脇の壁には、今マナがいる部屋と同じ造りのドアが等間隔に備え付けられていた。

「ユウ……」

呼んでみたが、返事はない。

左側に視線を向けると、階下へと通じる階段の手摺りに気づいた。たくさんのドアをあけてユウを探すより、まず下へ降りてみよう。とマナは考えた。

マナは知らなかったが、この廃墟はかつては多くの人間が宿泊する場所として使われていたのだ。その階だけでも部屋数は多くあった。

階下へ降りてみると、造りが変わっていた。外へ通じる、これまでガラス張りの入り口がある。広い空間だが、四方にどこへ続いているのかわからない細い通路がたくさんある。階下へと通じる階段のすぐ隣の部屋の扉だけが開いていることに気づき、マナはそっと覗き込んだ。

ユウと老人がいる。

老人は木でできた椅子に座っていた。

その膝に頭を持たせて、ユウは動かなかった。初めて見たときは驚いたが、もう老人の姿に怯えることはなかった。

どうしてあんなに怯えたのか、今は不思議なくらいだ。

「――」

何だかひどく、その光景はあたたかくて、なぜかマナには声がかけられなかった。どうしようかと考えてしばし過ぎた時、

「マナ？」

不意に、ユウが気づいた。

マナのほうに驚く。

互いの視線が相手を認め、ユウは慌てたように老人から離れた。

「あの、あたし、目が覚めたら誰もいないから」

ユウはマナに声もかけずに部屋を出る。

走るように細い通路の一つへと消えていく。

「マナ、入っておいで」

揺り椅子に座ったまま、老人は声をかけた。

「ユウは朝食の支度をしに行っただよ。それまで、私の相手をしておくれ。おまえさんに話があったんだよ」

マナは言われたとおり部屋へと入った。

老人の傍のベッドの上に座る。

「あの、昨日はごめんなさい。あたし、驚いてしまって、それで」

老人は首を軽く振って微笑んだ。

「いいんだよ。人間は、未知なるものを恐れるようにできている生き物だ。知った上でどう判断するかが問題なのだよ」

マナは、その穏やかな老人の態度に安堵した。

そうなったら、今度は好奇心を押さえ切れなくなった。

「ユウとあなたは、どうしてこんな廃墟に住んでいられるの？　ここは古い時代に造られたものでしょう？　管理システムのない不便な建造物だとディスクで見たのに」

「ドームでしか生きられないと、教えられたのかね？」

マナは素直に頷く。

「だが、私達は生きている。人から教えられることも大事だが、自分で実際に確かめ、知ることとても大事なことだ。おまえさんは私達とともに一晩この廃墟で過ごし、何事もなくこうしてここにいる。それが、おまえさんの判断すべき事実なのだよ」

事実。

その何度も使い古された言葉は、老人の唇から語られると、ひどく重要な響きを持っているように感じられた。

「私達は登録を抹殺された人間なんだよ。もうどれくらい前なのかもわからないが、我々の何十代か前の祖先が、ドームを離れて外の世界で生きることを選んだ。わずかな機器と、食料となるだろう種子を持ってな。当時の生活は困難を極めたと聞くよ。無理もない。それまでの人々は、全てを機械に頼って生きていたのだから。挫折して戻っていった者もいたという。だが、残った人々はこの世界と

バランスよく共存することを学び、そうして私達の代まで続いてきたのだ」

「信じられない。そんなことが、可能なの……」

「マナ、おまえさんは、今までドームの中の世界しか知らなかっただろうが、もつとずつと、それこそ気が遠くなるほど遙かな昔には、我々はこの空の下で自由に生きていたのだよ」

「――」

「昔の人間にできたことが、今の我々にできないと思うのかね。身体的に、退化したわけでもない。退化したのは、精神の面においてなのだよ」

深い、心に染み透るような声を、マナは聞きもらさないようじつと耳を傾けていた。

「どんなに時が過ぎようと、世界はいつでも我々に優しい。それを先に切り捨てたのは、我々の方なのだ」

老人は、大きな窓から見える、足早に影を落としては去っていく雲を、瞳を細めて見送った。

その顔は、この景色を愛おしむ想いに溢れていた。

「外の景色を見て、美しいと思わんかね。この世界は、美しい光と色に満ちている。どの時代より、きつと今、世界は一番美しいだろうと私は思っている。」

この廃墟が、かつてはこの地の至る所に立ち並んでいた時代、大気は汚れ、水は淀み、地は腐り、木々は死んでいた。

だが今、大気は澄み、水は潤い、地は清らかに、木々は優しく歌う。

連鎖という言葉を知っているかね。全ては循環するのだよ。植物も、動物も、もちろん人間も、全てが等しく地上をめぐる生命の環の中にあつた。

だが、人間はいつからかその環の中から外れてしまった。この時代の中で、今は人間だけが異質なのだ。我々がこのような時代を迎えたのも、当然のことなのかもしれん……」

「――」
マナは正直、老人の言うことを全て理解できたわけではなかった。ただ、熱心に聞き入っていたそのわけは、老人の言葉が今までマナの学んだどれにも当てはまらなかったからだ。

抽象的な概念と証明のない思想。

マナはそのことにとても興味を覚えた。

物思いにふけるマナに穏やかな視線を向け、老人は言葉を繋ぐ。

「ユウを、許してやっておくれ。あの子はまだ子供だ。我々が大事に大事に甘やかして育ててしまった。優しい子だが、とても淋しがりなのだ」

「あなたが、いたのに？」

「私がいてもだよ。あの子にとって必要なのは、決して手に入らないものだ。それ以外の何を与えても、あの子は決して満たされないのだ」

「ユウの欲しいものって？」

「決して会えないもの。決して許されないもの。決して愛せないもの。あの子が望んでいるものは、そういったものだ。あの子自身がそれを一番よく理解している。だから、淋しいのだ。」

そして今、ユウはおまえさんの中に、手に入らなかったものを重ねている。だが、おまえさんはそれにはなれない。おまえさんはいずれ戻る子だからな。すまんが、それまでは私達と一緒にいておくれ。ユウも落ち着けばおまえさんを返す気になるだろう」

「いいわ。あたし、ここが何処かもわからないの。ひとりでは帰れないわ。きつともう少ししたら、博士が来てくれるかもしれないし、それまでは一緒にいてもいいわ」

「ありがとう、マナ。おまえさんは優しい子だね。では食堂へ行こうか。きつとユウが朝食を作ってくれているはずだ」

老人が杖を支えに椅子から立ち上がり、ドアに向かってゆつくりと歩きます。マナはその後ろ姿に、無意識のうちに呼び掛けていた。

「おじいちゃん」

呼んでから、マナは狼狽えた。

呼んでみたかったのだ。

ユウが老人をそう呼ぶのが、とてもあたたかく、優しい感じがしたから。

振り返った老人は、そんなマナの動揺を気にしたふうもなく、次の言葉を待っている。

「そう、呼んでもいい…？」

ためらいがちにかかる声に、老人は穏やかに微笑う。

「ああ。いいとも。さあ、食事にしよう」

「シイナ。連絡は受けている。詳しい状況を説明してくれたまえ」

シイナがその部屋に入るなり、重みのある穏やかな声がかかる。

「説明なら、後でいやというほどご報告します。それよりもカタオカ、すぐに搜索隊を編成してください。一刻も早く、マナを取り戻さなければ」

カタオカは、椅子に腰掛けたままシイナを見つめていた。五十代の貫禄を備えたこの男は、シイナの焦燥とは裏腹に、落ち着いていた。

「待ちたまえ。そんな大がかりなことを私一人で決めるわけにはいかない。議会を召集しよう。議員にすぐ集まるように言う。二日待ってくれ」

「二日っ！？ あなたにはことの重要さがわかっていないのですか！？ さらにわかれたのは、マナなんですよ！？ 彼女は、我々人間に残された唯一の女性なんです。彼女を失えば、私達は滅びるだけだというのに、なぜそう悠長に構えているんです」

「無駄に焦ってもよい結果は生まない。マナはさらわれたのだろう？ ならば生命の危険は、今のところはないのではないかね。マナの命が目的なら、彼が侵入した時点で実行されているだろう」

「だからといって、この先もマナに危害を加えることがないと、言い切れますか。我々人間は外界の苛酷な環境に耐えられるほど強くはない。マナもそうです。急激な環境の変化に、マナが耐えられるのかもわかりません。一刻も早く救出しないと」

「だが、搜索を開始しようにも、行き先に、見当はあるのかね。外は広い。搜索は日数もかかるだろう」

「指揮なら私がとります」

「いや、それはいかん。君にはドーム内を統括する役目がある。こ

「こには、君は必要不可欠なのだ」

「――」
悔しいことに、それは事実だった。研究区域の統率だけではなく、シイナは事実上このドームを統率していた。もとの統率はカタオカが行なっていたのだが、数年前から彼はこのドームの全権を彼女に委ねていたのだ。

「では、今すぐに議会の召集を。急げば明日の朝には議会を開けるはずです。」

あなたは我々の議長です。数少なくとも権限はおありのはずです。今すぐ行使してください」

言い捨てると、もう用はないといわんばかりの態度で、シイナは部屋を出、足早に進んだ。苛立たしさが足取りをも急がせる。

「議会は召集されることに？」

前方からかかる声。

視線を向けると、フジオミが自室扉のすぐ脇の壁に背を預けて立っていた。

「あなたはまた出席しないつもりなの」

「僕には、あえて発言すべきことはないよ。例え時間がかかろうとも、君の望みは通るだろう。そのためだけの議会だ。僕が出る必要はない」

言いように、シイナは苛立った。自分の行動を揶揄しているようにも聞こえる口調を、彼女は昔から大嫌いだった。

この世界で一番嫌いな男。

なぜこんな男がいるのだろう。

自分がどれだけの義務を背負っているのか、真に理解してもいない。

ただ己れの快楽のためのみに生きている。

一番腹立たしいのは、そんな男でも、この世界で一番必要だという事実だ。

唇を強く噛んで動かないシイナを、フジオミは訝しげに見つめた。
「疲れているようだね。そんなに気を張りつめていると君のほうがまいってしまうよ」

「あなたは何とも思わないの!?　さらわれたのは、あなたの伴侶　なのよ!!」

見当外れな配慮に、シイナは堪え切れずに叫んだ。

しかし、思いもかけないシイナの怒りに、フジオミは一瞬戸惑いはしたものの、すぐに納得したように肩を竦める。

「愛しいと思うほどには、まだ愛していないからね」
そんな飄々とした彼の態度が、シイナにはますます腹立たしかった。

「あなたといると苛々する」

言い捨て、その場を去ろうとするシイナを、フジオミは興味深げに眺めていた。まるで玩具の動きを楽しむかの如く。

ややあつて、シイナの背後に声がかかる。

「じゃあ、僕の性欲の処理は?」

立ち止まるシイナ。ゆっくりと振り返る。

「マナがまだなら、君が当然相手をしてくれるんだろう?　君の義務だ」

「今がどういふ状況かわかってるの!?　あなたは——」

「僕は正直な質でね。嘘はつけない」

悪怖れずに言うフジオミ。

シイナは叫びだしかけたが、結局それをやめた。あきらめたようにフジオミの脇を通り抜け、彼の部屋に入ると、乱暴に白衣を脱いだ。

「そこまでにしておいてくれよ。僕の楽しみがなくなる」

フジオミの楽しげな声に、シイナは激しい嫌悪を覚えたが、黙っ

て彼が近づいて来るのを許した。

「半月ぶりだけど、君は、誰かと寝た？」

「くだらないことを。ここの職員はクローンよ。あなたのように性欲があるわけないわ」

「それは結構」

フジオミは慣れた手つきでシイナの身につけているものを剥いでいく。

シイナは彼とのセックスが何よりも嫌いだった。

所詮無駄な行為だとわかつているのに、なぜこの男の欲望はつきないのだろう。

遙か昔、人類は性交を繁殖のためではなく己れの快楽のために行なっていたという。

人間だけが、繁殖期を持たずに欲望を脳でコントロールする。それは人類の始祖が直立歩行を始めた進化の過程からだという。

そしてその時から、人類は地上を支配する征服者としてあらゆる生物の上に立った。

地上を支配し、その繁栄を極め、もてあましていた人類は、もはや繁殖のための性交を必要としなくなっていたのだろうか。

自然界では、繁殖のための伴侶を選ぶ権利があるのは雌だ。けれど、人間は違う。人間

は何においても雄——男が権利を優先している。同じ動物でありながらのこの違いは、一体何に起因するのだろうか。

答えは簡単だ。シイナは思う。

人間は——特に男は、繁殖を重要視しないのだ。だからこその動物と違い、女を軽んじ、奴隷のように扱い、力づくで従わせ、己れの快楽のためのみの性交を続ける。

やがて人間からは生殖能力が奪われた。

それと同時に性欲も奪われた。一握りの特別な人間を残して。

自然に反した形態が、今日のような結果を齎したのだとすれば、男性優位の人間社会が滅びの一端を担っているのだと言っても、あ

ながち嘘ではないのかもしれない。

しかし、繁殖という自然界の掟に反して行なわれる性交の結果がこれだとすれば、人類はなんという重い代償を支払ったのだろうか。「何を考えてるんだい」

耳元にささやく声に、シイナは思考を中断される。

フジオミもまた、今までの男達と同じに愚かな行為を繰り返している。

それなのに、やはり彼は選ばれた者なのだ。彼の中には昔のままの血が流れている。強い欲望と、命への渴望と、未来への希望が。それだけは、認めざるをえない。

「何も――」

ベッドに押し倒されて、唇が重なる。愛撫する手に、じっとシイナは耐えた。早くこの行為が終わってくれることを。

「――」

フジオミの手は、身体の奥の、忘れ果てていた記憶を甦らせる。それが、いやだった。

シイナには、もともと性欲はなかった。

フジオミの相手をするようになってからも、自分の内に性的な欲望が芽生えることはなかった。

それ自体に、嫌悪さえ感じていた。

だが、フジオミは違った。

彼は正常な男性だったし、性欲を処理する相手が必要だった。

生殖能力のあるものは同性との性交は禁じられていたので、必然的にシイナが相手にならざるをえなかった。

彼女はすでに自分に生殖能力がないことを知っていた。

生殖のない行為は無駄だと彼女は議会で述べたが、却下された。

それは彼女に与えられた義務であると。

そうして、シイナはフジオミに抱かれた。

初めてフジオミと寝た時のことを、シイナはまだ覚えている。二人とも、十四歳だった。

シイナにとってそれは恐怖以外のなにものでもなかった。身体を愛撫される嫌悪と、貫かれる苦痛に、彼女は泣き叫んで解放を求めた。

だが、フジオミは己れの欲望を満たすまで、決して彼女を解放しようとはしなかった。

そして、彼女は悟ったのだ。

生殖能力のない、けれど女性体である自分はただ、この男の性欲の処理として扱われるだけなのだ。

その事実、彼女の誇りを踏み躪った。

全てにおいて他より抜きんでていた彼女であつたが、子供が産めないということだけで、自分の意にそまぬことを強制され、従い続けなければならないのだ。

それは、隷属以外のなにものでもない。

決して対等の人間として扱われることのない怒りが沸き上がる。

彼女は己が身を呪い、疎んだ。

だが、それ以降何度フジオミに抱かれても、彼女はただ従順に従った。

決して泣き叫ぶことはしなかった。

それこそが、彼女に許された唯一の自尊心であつたのだ。

シイナにとって苦痛としか言えない行為が終わり、彼女はすぐに衣服を身につけた。

部屋を出ていこうとするシイナに、背後からフジオミが声をかけた。

「質問を、いいかい？」

シイナが振り返る。

「手短にして」

その場で聞くつもりだ。

「ユウという少年のあの姿は何だ？ 見たこともない容姿だった。奇形か？」

「遺伝病よ。言ったでしょう、ユウは実験体なのよ。失敗した、出来損ない」

「人体実験をしたのか」

かすかに非難めいたフジオミの口調にも、シイナは動じない。

人体実験は、過去幾度となく繰り返されてきたことだ。

それなくして医学の発達などありえなかった。

それが事実だ。

シイナは他人が向ける無言の非難を今まで幾度となく感じていたが、特別な感傷はなかった。あるのは、偽善めいた他者の感傷に対する侮蔑だけだ。

実験対象が、動物から人間に変わったただけだ。

同じ命を扱うことに変わりはない。

むしろ彼女にとっては、人間よりは動物の方が、よっぽど守るべき価値があると考えられる。

同じ動物でありながら、人間は駄目だという考えは、偽善以外のなにものでもない。

非難されるべき理由がどこにある、この退廃した世界で。

シイナはかすかに笑んだ。

「ユカは完全な女性体でありながら、子供を産むことはほとんどできなかった。妊娠しても流産や死産で、もう正常な子供は望めないこともわかっていた。だから、あれは最後の実験だったのよ」

もう十年以上前のことだ。

ユカなら、フジオミも憶えていた。

今の自分達より少し年上の美しい女性だった。会うたびに優しく笑いかけてくれた。厳しいことも言ってくれた。それはフジオミの

決して理解することのできない母性を、垣間見せるかすかなぬくもりだった。

フジオミの母は出産の後、我が子に乳を与えることもなく亡くなっている。父もとうになく、彼は物心ついたときから一人だったのだ。

そういえば、最後に見たあのとときも、ユカは身籠もっていた。

事実上純粋なサカキの血脈は、ユカと彼女の兄であるマサトで絶えていた。

彼等の両親はいとこ同士だった。

マサトは時期が合わず、伴侶を迎えることなく死んだ。

ユカも最後の出産の後、三年ほど経って事故で死んだ。

だが、それでもフジオミの憶えているかぎり、ユカは幸せそうだった。

目立ってきたお腹を擦る仕草は美しかった。

ふと、彼の内に疑問がわきあがる。

そんな彼女が、我が子を実験に使ってくれなどというものだろうか。

「ユカは、彼女は承諾したのか」

「ええ。むしろ彼女が進んで志願したのだそうよ。この実験の成果が次代の研究に役立つようにとね」

「まさか、同じサカキの、マサトの凍結精子を――」

「そう。ユカの最後の人工受精は近親者のものを使ったの。皮肉だね。他のどの正常な精子を使っても駄目だったのよ。それなのに、近親者の、実の兄の子供だけが、産まれてきた。もちろん、事前に遺伝子操作はしたわ。」

でも、こんなに著しい結果がでるなんてね。先天性の遺伝病。しかも、生殖能力もないなんて」

ユカとマサトは極めて正常な強い遺伝子を保有するサカキという家系の子孫だ。シイナとフジオミという家系も、ここの血を少なからずひいている。確かに実験にこれほど最適なものもない。

繰り返された他との交配によってそれぞれ血こそは薄れたが極めて近いものである。

薄められては重ねられる婚姻も原因して、ほとんどの血筋は絶えてしまった。

出生率と平均寿命の低下。

年老いぬ内に、人々は死を迎える。

結果として、サカキの家系はユウを残して絶えたことになる。

フジオミの家系は正常な彼だけを残して絶えた。

そしてシイナの家系も絶えた。染色体性半陰陽という不妊の彼女を残して。

その家系の血を継ぐ人間がひとりしか存在しないことによって、彼等は彼等の姓を受け継いだ。すでに名前に意味はなく、血筋をたどる証として。

「待ってくれ。君はユカの最後の子供は、ユウだと言ったな？」

「そうよ」

「じゃあ、マナは、彼女は一体何なんだ？」

僕はずっと、マナがユカの最後の子供なんだと思っていた。だが、彼女は サカキ じゃない。ユウにそれを継ぐ資格はないのはわかってる。登録を抹消されたんだからね。だが、マナは正常なはずだ。あの二人は双子ではないのか？」

シイナは首を横に振る。

「マナは今十四よ」

「ユウは」

「十六」

淀みなく答えるシイナに、フジオミの違和感はある。

「待ってくれ、年齢が合わない。マナとユウは双子の兄妹でさえありえない。マナはサカキではないのか？」

「いいえ。マナもサカキよ。ただし、ユウがいてもいなくても、マナはサカキの名を継げない。あの子の子供が継げても、マナ自身には、その資格はないのよ」

「——じゃあ一体、マナは何だ？」

「わからないのも無理ないわね。あなたもマナのことは知らなかったもの」

そう、それこそが自分の計画だった。

どんな些細な失敗も許されない、滅びかけた人類を救うべき、長い年月を要する計画。

「マナは——」

恐ろしい告白がフジオミの耳に届いた。

マナがユウ達と暮らし始めてから、すでに四日が経っていた。

マナは彼らの生活に驚きながらも、素直にそれを受け入れた。もともと、彼女にとって生活というのは与えられたものを享受することが大前提にあったので、それがドームにいてもここにいても大差はなかったのである。

マナの日課は、ほとんど決まっていた。

朝起きて朝食を終えると、老人とともに散歩をしながら色々な話をする。その後昼食をとり、今度はユウと廃墟や周囲の景色を散策する。そうして夕食をとり、シャワーを浴び、寝る。もちろん、絶えず彼らと一緒にいるわけではない。特にユウはすることがたくさんあるので、散策の最後には、マナはいつも一人にされる。

ここでの生活は、全てユウにかかっているのだから、マナとしても別段文句もない。

ただ一つ、気になることと言えば、朝食を終えて、マナが老人と話をしている時、ユウの姿がどこにも見えないということだけだった。

そして、どんなところでも案内してくれる彼らが、決してマナを近寄らせない場所が一つだけあった。それは、彼らの住んでいる廃墟の、地下へ通じる扉の奥だった。

マナは、ユウが午前中はそこにいるのかもしれないと思ったが、口には出さずにいた。その間、穏やかな時間が流れていたようにも思えるが、それは表面だけのことだった。

あまりにも違いすぎる環境で育ったマナとユウにとって、衝突は必然のことだったのである。

そしてそれは、ほんの些細なことだった。

後になってから、マナも、怒ったユウ自身にも何が原因だったの

か思い出せないほど、そんな些細な。

「何でもいいわ。ユウが決めて」

いつもどおりにそう言ったマナに、ユウは苛立たしげな表情を見せた。

「ユウ？」

「馬鹿じゃないのか、あんた!!」

突然声を荒げたユウに、マナは身を強ばらせた。

「自分のことだろ？ 自分が決めるよ、そんなこともできないのか!？」

二人の会話を、少し離れて聞いていた老人が、間に入る。

「これこれ、ユウ。そんなに声を高くして言うこともないだろう。

見なさい、マナが怯えている」

「だって、おじいちゃん」

「マナにはマナの、ドームでの生き方があったんだよ。それを理解しておあげ。自分の望みばかりを押しつけるのもいい方法とは言えんよ」

宥めるようにユウの肩をたたいて、老人はマナを振り返った。潤んだ瞳はじつと床を見つめていた。

「さあ。マナもそんなに恐がらなくてもいいんだよ」

マナは近づく老人の身体にしがみついてしゃくりあげた。老人はしばらくその背中を優しく撫でていたが、その後マナの身体を優しく離し、視線を合わせるように屈み込んだ。

「マナ、おまえさんも急に怒られたんでびっくりしたんだろう？」

泣きながらも、マナは頷いた。

「だが、ここで私達という以上は、おまえさんもここでのやり方を学ばなければならぬよ。どちらがいいか、選ぶだけでいい。少しずつ慣れていくんだよ。わかったかね」

老人のあたたかな感情が伝わる。

「ええ…」

その日は、老人のとりなしで、何とかことなきを得た。

どちらもまだ、子供だった。

彼らが互いの環境を理解しようと努めるには、絶対的に経験値が不足していたのだ。

それでも、理解し合おうと互いが努力すれば、歩み寄ることはできるのだ。

そう、努力さえ、すれば。

たとえ真の意味で、理解できないとしても。

次の日、マナは外で散策をしていた。

別に目的はないのだが、ここにはマナにとって目新しいものがたくさんありすぎるので、退屈だけは、することがないのだ。

やわらかな風の中、マナは不意に、少し離れた草原に、生き物の姿を見つけた。

「かわいい!!」

思わず、声に出してしまい、慌てて口元を押さえる。

前に学習した時、見たことがあった動物、ウサギだ。耳が他の動物より長いので覚えていた。一匹だけではなかった。大きいウサギが一匹。それより小さいウサギが三匹ほど、かたまっで動いていた。どうやら親子らしい。

（もっと近くで見てみたい）

そう思った。だが、近づいてもいいものなのかどうか、自信がなかった。

どうしようかと悩んでいると、視界の隅にユウの姿をとらえた。

「ユウ、ユウ」

声をひそめて呼びかけ、急いで手招きすると、ユウは訝しげな顔で走ってきた。

自分も興奮していて、マナはユウが手に持っているものにほとんど注意を払っていなかった。

「どうした、マナ」

「ねえ、ユウ、あれ、ウサギでしょう？ 本物のウサギよね。近くにいてみても大丈夫かしら」

マナの指差す方を見つめ、

「いや、だめだ。逃げる」

ユウはすばやく手に持っていたボウガンを取り上げ、ねらいをす
ます。

ボウガンを見たことのないマナでも、それが武器であることはす
ぐにわかった。

「何するの、ユウ!？」

「捕まえるんだ。今日の夕飯にする」
マナは驚いた。

(ウサギを食べる?)

ユウの言葉が信じられなかった。

動物の肉を食べるなんて、聞いたこともない。瞬間に、鳥肌が立
った。

「駄目よ、あんな小さい生き物を殺すなんて!!」

だが、言いおわる前に、矢はボウガンを放れ、狙いを過たずに親
ウサギの背中にあたった。

「!？」

すぐにユウが、ウサギのところに走っていった。子ウサギはすで
に逃げていた。

ウサギの耳を無造作につかんで、ユウは平然とこちらに戻って
くる。

マナは動けなかった。身体が震えていた。

すぐ近くまで来た時、生臭いにおいがした。血のおいだった。

それが、ひきがねになった。

「なんてひどい！！ 命を殺すなんて、最低だわ！！」

叫ぶように、マナは言葉をぶつけた。

ぶつけられたユウは、なぜそんなことを言われるのかわからないといった顔つきで、マナを見ている。

「何言ってるんだ？ 食わなきゃこっちが死ぬんだぞ」

「自分が生きるために、他の生き物を殺してもいいって言うの！？ そんなの間違ってるわ、おかしいわ！！」

「ウサギは貴重なたんぱく源なんだ。マナだって、食べればうまいって思うさ」

呆れ返ったようにユウは肩を竦めた。

「信じられない、こんなひどいことするなんて。あたしはウサギなんか食べない。絶対食べないわ！！」

「わがまま言うなよ、マナ！！」

「自分で決めるって言ったのはユウじゃない！！ あたしが食べないって決めたのよ。どうして怒るの！？」

互いに睨み合ったまま、二人はしばし動かなかった。

口を開いたのは、ユウの方だった。

「勝手にしろ！！」

苛立たしげに足元の瓦礫を蹴りつけ、ユウはその場を離れた。

マナはその場に座り込んで昨日に引き続き、声を殺して泣きだした。

「マナ、夕食を食べないんだって？ どうしたんだい？」

日が傾いてきたころ、部屋にこもったきりのマナの様子を、老人が見に来た。マナはベッドの中で、シーツを頭からかぶってふて寝していた。

「だって、気持ち悪いんだもの」

「気持ち悪い？」

がばつ、とシートを取り払って、マナは起き上がり、老人と向き合った。

「知らなかったのよ。ここで食べているものが、動物の体だなんて動物を解剖するのを、ディスクで見たことがあるわ。あんな小さくて可愛いものの体を食べるなんて、信じられない」

老人は困ったように笑った。

「そうだなあ。何も殺さずに、奪い過ぎることなく生きていけるなら、マナの言うとおり幸せだろうけれど、生きるために、必ず人は何かを犠牲にしているんだよ」

「嘘。だって、ドームでは動物を食べたりしないわ」

「では、マナが食べるものは一体何から作り出しているんだい？」
問い返されて、マナは返答につまる。

「——わからない。知らないわ。だって、いつも用意されてあるから、それを食べているだけよ。ああいうのが初めからあるんじゃないの？」

老人は声を出さずに笑った。

「マナが食べているのは、加工品だよ。もともとあったものをそうとわからないようにつくりかえているだけなんだよ」

「じゃあ、あたしが今まで食べていたものの中には、動物の体もあったの？」

「ドームでの食事を見たことがないから何とも言えんが、多分な。きつと豚か、牛かなんだろうな」

じわりと、マナの瞳が滲んだ。

「あたし、死んだ動物の体を食べて生きてきたのね」

老人は、マナの隣に腰をおろし、そつと手を握った。安心させるように。

「マナ、我々人間は、そういう生き物なんだよ。生きるために、別の命を奪って、それを食べる。人間だけでもない。生き物というのは、そういうふうにしかな生きていけないようにできているんだよ」
「そんなの哀しすぎるわ」

「ふむ。では、こう思うといい。おまえさんに食べられた動物は、おまえさんの一部になったのだと」

「一部？」

「そうだ。食べられた動物は、おまえさんの血に融け、新たな肉となっておまえさんとともに生き続ける。だから嘆く必要はない。おまえさんは、自分の命を大切に生きるんだ。それが動物にとっても救われる」

マナは不思議そうに老人を見つめた。

「それは、本当のこと？」

「おまえさんが信じれば、それはいつでも真実なんだよ」
穏やかに諭されて、マナは何となく納得したくなった。

老人の言葉は、何だかあたたく心に伝わるのだ。その証拠に、さつきまであんなに哀しかったのに、今は全然平気だ。手のぬくもりと一緒に、老人の感情が伝わったからだろうか。だから、マナはそれを信じることにした。

「ユウは、あたしのこと嫌いなのかしら？」

不意に呟いたマナに、老人は驚いて問う。

「なぜそう思うんだい？」

「だって、いつも怒ってばかりだわ。初めはとっても優しくかったのに。怒られたって、あたしにはどうしようもないのに。あたしにとつてはそれが当たり前だったんだもの。急に違うって言われても、わからないじゃない。でも、ユウはそんなことちつとも考えてくれないんだわ」

「マナは大事に育てられてきたのだなあ」

老人の言葉に、マナは微笑んだ。

「ええ。みんな優しくったわ。博士も、フジオミも。周りにいたクローン達もみんな。ユウみたいにうるさく言わなかったし、あたしに怒ったりしなかったわ」

そこまで言うと、不意にマナの表情が哀しげに歪んだ。

「——おじいちゃん、あたしドームに帰りたいわ。ユウに言ってみ

てくれないかしら。ユ

ウだって、きつともうあたしの顔なんか見ていたくないはずよ。嫌われてるんだもの。あたしがいなくなっただ方が喜ぶかもしれないわ」「マナ。ユウがおまえさんを嫌いになるなんてことはないよ。ただ、ユウにもわからないんだよ。おまえさんにどう接すればいいのかね。ユウは同じ年頃の子供と話したことがない。周りはみんな大人ばかりだったからね」

「ユウも、同じ?」

「ああ。きつとユウも今頃後悔しているよ。なんとか仲直りしておくれ。おまえさんも、ユウと喧嘩したままドームに帰るのはいやだろ?」

「ええ。でも、ユウは許してくれるかしら」

「大丈夫。おまえさんを許さないなんてことは、絶対にありえないよ。ユウはマナを好きだからな」

「そうならいいんだけど」

階段を上がってくる気配をドア越しに感じて、マナは大きく息を吸った。そして、大きく吐くと、思い切ってドアを開けた。

「ユウ」

振り返ったユウは、少し驚いた顔をしていた。まるで、マナが自分に話しかけるのが信じられないように。だが、すぐにそんな表情は消える。マナのちょうど斜め向かいの自室に入ろうとノブに伸ばしていた手が離れる。

「何? 何か用があるのか?」

「ええと……」

かけるべき言葉を用意していなかったことに、マナは気づいた。声をかければ、どうにかなると思っていたのかもしれない。

「マナ?」

じつとユウを見ていたが、その表情からは何の感情も読み取れな

い。どんな言葉をかけるか考えるより先に、マナはユウの手を両手で捕まえた。

ドームでは感じたことはなかったが、ここへ来てから、マナには不思議な力が現われるようになっていた。ユウや老人に触れているとその時の感情がわかるのだ。もちろん、考えていること全てがわかるのではない。ただ、言葉として感じられない感情を、波のように、温度のように、感じ取ることができるのだ。そして、もっと不思議なことに、ユウに対して、この力はもっとも強く働いた。

ユウが咄嗟に離れようとするのを、そのまますっかり逃がさない。触れる手から流れこんでくる感情。戸惑いと、痛みによく似た切ない感情だ。

「マナ、これはずるい……」

「だって、言葉だけじゃユウの気持ちはわからないわ。ユウは全部を言ってくれないもの。それに、本当のことをいつでも言ってもくれないわ」

手を離さないマナをあきらめ、ユウは溜息をついた。

「言いたくないんじゃないんだ。ただ、どうやっていいのかわからないだけだ——」

「ユウ……」

ユウの言葉は正直だった。彼の感情には様々な揺れが感じられた。「思ってることを正直に口にするのは、俺には難しい。だって、そんな必要、今までなかったから」

マナと接するうちに、ユウも気づいていたのだ。それまで自分と一緒にいてくれたのは大人達ばかりだったことを。多くを語らずとも、彼らはユウの感情の機微を敏感に察してくれていた。だが、マナは違う。自分よりも年下の少女だ。老人達と接してきたようにはいかないのだ。

「言わなくても、いつもみたいに通じるって思ってた。おじいちゃん達はみんな、俺が何にも言わなくても俺の言いたいことわかってた。でも、マナには俺の考えてることが通じないから、どう

していいかわからなくて、苛々してたんだ」

「ごめんなさい。あたし、自分のことばかりで、ユウの気持ち、全然考えてなかったわ。あなたも、平気なはずなのに」

「違う。俺が悪いんだ。俺が勝手に苛々して八つ当たりしたんだ。わかってなかったんだ。俺が考えること、マナもわかるって勝手に思ってたんだ」

互いの中で、相手に対する戸惑いや怒り、悲しみなどの微妙な感情がとけていくのがわかる。マナはさらに言葉を繋ぐ。

「ねえ、あたしたち、もつといっぱい話しようよ。そうしてお互いをもつと知るのよ。そうすれば、きつともつと楽しくなるはずよ」

「話すって、何を話すって言うんだ？」

「何でもいいのよ。心の中までは、わからないもの。伝えたいことはきちんと言葉にしなくちゃ。あたし、あなたに怒られるたびに悲しくなるの。あなたがあたしを嫌いなんだって思ってしまうの。そんなのいやだわ」

「俺は、マナを嫌ったりなんか、してない。ただ、マナが何でも俺に決めてくれて言うのがいやなんだ。だって、何だかどうでもいいように聞こえるんだ。何もおもしろくない、何もしたくない、そんなふうに思ってるからどうでもいいって答えるんだって、思ったんだ」

マナは慌てて首を振った。

「そうじゃないわ。どうでもいいんじゃないの。あたしね、今まで自分で決めたこと、なかったの。だって、そういうことは博士がみんなやってくれたから。あたし、ドームではみんな決めてもらってたの。それが当たり前のことだったから。ずっとそうだったから。」

ここではユウが決めてくれると思ってたの」

「俺は、マナに自分で決めてほしいんだ。それが俺の気持ちと違ってても、同じでも、とにかく、マナの気持ちが知りたいんだ」

「わかったわ。今から、そうする。自分がしたいこと、行きたいと

ころ、見たいところ、自分で決めるわ。それなら、ユウはもう怒らない？」

「——うん」

「よかった」

マナはほっとしてユウから手を離れた。

「ねえ。あたしたち、怒ったりしそうになったら、ほんの少し我慢して考えましょう。自分の気持ちをきちんとわかってもらうためには、どんな言葉を使えばいいのか。例えば、きちんと伝わるのか、そういうことを、一緒にやっていきましょうよ。そうしたら、きつともっと仲良くなれるし、お互いを好きになれるわ」

「俺は、今だってマナが好きだよ」

「ええ。あたしもユウが好きだわ。でも、やっぱりそれって、言葉にしなくちゃわからないじゃない？ あたし、今ユウと話せてよかったわ。ユウの考えてること、ユウが言葉にしてくれたからきちんとわかったもの。あなたも、あたしが考えてたこと、わかってくれたでしょう？」

「ああ」

「ね、そんなふうにお互いのこともっとわかったら、喧嘩しなくてもよくなるわ。それに、前よりもっと好きになれるわ。だから、これからたくさん話をしましょう」

一生懸命に語るマナに、ユウは微笑った。

「わかった」

「よかった。じゃあ、あたし、もう寝るわ。おやすみなさい」

「ああ。おやすみ、マナ」

背中を向けてから、マナは思い返したようにマナは振り返った。そして、ユウに言う。

「ねえ、ユウ。明日からあたしにも、料理の仕方を教えてくれる？」

「マナ！？ 無理しなくていいんだー！」

また何を言いだすのかといったように、ユウは困った顔をした。だが、マナはユウが先程言ったように、自分で考え、自分で決め

るには、もつとたくさんのかことを知らなければならぬのではな
いかと思つてゐたのだ。

そう話すと、ユウは素直に納得してくれた。

「一緒にゐるんだもの。あたしもできることをしなくちゃ。でも、
自信がないから、ちゃんと教えてね」

マナの料理を習うという初めての試みは、驚きの連続ばかりだった。

何しろ、出されたものを食べるだけだったのだから、料理に関する基本的なことさえも知らないのだ。自分が食べていたものが、本当はどんな形をしていたのか、それを知るだけでも、マナには新鮮だった。

覚えることは、もちろんそれだけではない。

材料を切ったり皮を剥くための器具の扱いや、調理のための器具の名称、たくさんありすぎる調味料の使い方、それらの準備や後始末、また食事のためのテーブルセッティングや食器の使い分けなど、きりがなほほど学ぶことはたくさんあった。

だが、今度は楽しく料理をすることができた。

朝昼晩と、料理を作るときだけでなく、空いている時間全てを使って、ユウが最初から丁寧に教えてくれたからだ。マナの失敗を怒ることなく、時間をかけて根気強く教え続けた。

そうして、一週間もすると、食事の支度のほとんどは、マナにもできるようになっていた。もちろんユウも一緒に作るが、下ごしらえ程度だ。仕上げはどんなに時間がかかってでもマナにやらせてくれる。

マナは朝起きて身支度を整えると、すぐに朝食の準備をする。

テーブルを拭き、食器を並べる。

熱いスープとご飯をよそい、昔ながらの箸で、大皿に持ったおかずを取り分け、つつきあう。

老人とユウと三人で、一日の予定を話し合いながらの食事。

他愛のない会話で、笑い合いながらの食事。

それは、マナの今まで知らなかったもの。学びはしたが、実現す

ることはないと思っていたもの、だった。

ユウは食器を洗いながら、マナはお昼のお弁当にするおにぎりを握りながら、これから登る、廃墟の東にある森の話をしていた。

「ねえ、ユウ。動物は、いるの？」

「ああ。うまくすれば、近くで見れるかもしれないな。見たい？」

「ええ。あ、ユウ、お塩とってちょうだい」

「ん」

「卵は茹でたのを持っていきましょう。それと、飲み物も。お茶がいい？」

「熱いのがいいな」

「ええ。これが終わってからね」

手際よく握ったおにぎりを包むと、マナは手を洗い、お茶の支度に取りかかる。

「お湯は沸騰してからよね。でも、入れるのは少し温度を下げたら」

「ああ」

やかんを火にかけるマナを見ながら、ユウが微笑う。

「マナ、料理も、お茶を入れるのも、俺よりずっと上手くなった」

「ほんと！？」

嬉しそうにマナが笑う。自分の料理や手際を誉めてもらうのはとても気分がよかった。マナはのみこみがはやく、器用だったので、コツをつかめば、ユウに教えられたことも二、三度で、すぐにできるようになってきていた。

今までマナが学んできたのはディスクによる知識ばかりだったから、何かを作ったり、身体を動かして体験することはほとんどなかったのだ。

ドームでも、もちろんすることはたくさんあった。

ディスクによる学習、健康を維持するためのジムでのトレーニング

グ、そして、たくさんの検査。それがマナの義務だった。

空いた時間は読書や娯楽ディスクを観るなどではできたが、それもシイナによって厳選されたものを与えられるだけ。だから、時間というものは、マナに関係なく、ただ緩慢に流れ去っていくだけのものでしかなかった。

ここでの時間は、本当にあつという間に過ぎていく。

今までの生活と違い、不便なことはたくさんあった。それまでマナが当然だと思っていたことは、全て他人の手で整えられていたものだったのだ。

しかし、料理を含め、ここでは生活するために必要なことは全て自分達でしなければならなかった。

マナは初めて自分が着る服を洗濯し、干すことを知った。自分の部屋やトイレ、バスルームを自分で掃除することも知った。畑の草むしりも、水やりも知った。目を楽しませるために、花を摘んで飾ることも知った。風の流れ、雲のかたち、太陽の沈む様子で次の日の天候がわかることも知った。星の位置で、方角がわかることを知った。そして、傍らでそれらを教えてくれる人がいることの喜びを知った。優しい人達と一緒に過ごす幸福を知った。

一日一日が待ち遠しく、愛おしく、マナにはとても貴重だった。

今、マナは自分の意志で全て選び、自分のしたいことをすることができた。

自由。

今初めて、それを実感していた。たくさんの言葉を識っていても、本当の意味で知ることのなかったそれは、マナにとって、紛れもなく幸福だった。

小高い山を登りきり、マナとユウは下の景色を見下ろしていた。

もつと西には深緑に覆われた山がそびえている。

「ここからの眺めが、一番綺麗だ」

「ええ。とても綺麗だわ。なんて深い緑なのかしら。なんてあざやかな色なのかしら。山も素敵ね。霞んだ緑が、とても綺麗」

「おじいちゃんが言ってた。あそこは、レイジョウだったんだって」
「レイジョウ？」

「死んだら行くところだって」

「？ 死んだらどこにも行けないわ」

当たり前なマナの問いに、ユウはかすかに笑ってしまう。

「あ、今あたしのこと笑ったでしょう」

「うん」

「だって、おかしいわ。死んだら動けないわ。生命活動が終わるってことだもの」

「身体が行くんじゃないからさ」

「身体以外、人間に何があるっていうの？」

「魂」

「たましい？」

「意識さ」

「死ねば意識は失くなるわ。意識が失くなるということが、死ぬってことだもの。違うの？」

「おじいちゃんは、身体が死んでも、意識は死なないって言ってた。身体はかりそめの器で、俺達はみんな、その器に入っているだけなんだって」

「かりそめ？」

「一時的なってことさ。おじいちゃんがよく使う言葉だ」

「そんなの、聞いたことないわ」

「じゃあ、おじいちゃんに教えてもらうといい。おじいちゃんはそういうことにすごく詳しいから」

言い終えると、ユウはまた遠くへと視線を向けた。だが、マナはユウの先程の話を心の中で反復していた。

「でも、綺麗なところへ行くのはいいことだわ。だって、もし淋しくて何も無いところへ行くのなら哀しいもの」

「そうだな」

それから二人は、景色を見ながら、昼食を取った。

山は深緑に覆われ、本当にとても美しかった。見下ろす景色も茂る緑に覆われ、青い空の端を切り取る、見渡すかぎりの緑の絨毯のようだ。その中にも、若草色がまばらに点在し、太陽の加減であざやかに瑞々しい色合いを変えた。風に誘われるように、葉ずれの音がする。音も色も、一体となった一つの美だった。

「こんなに綺麗なのに、どうしてドームのみんなは外に出て見ようとしんのかしら」

「昔は、こんなに綺麗じゃなかったからさ」

「どういうこと？」

「廃墟を見るよ」

言われて、マナは緑の続く中、一画だけ灰色に埋めつくされている廃墟群を見下ろす。四角柱のでこぼこで、アンバランスな建造物は、確かにお世辞でも美しいとは言えなかった。

「昔は、あんなのが本当にたくさんあって、緑なんかほんの少ししかなかったんだってさ。汚い空気が充満してて、水も土も汚れ放題、ゴミで溢れかえってたんだって」

「ゴミ？　ゴミって何？」

「必要のないものさ。例えば野菜の皮や残り物のご飯や、そんなものかな」

「え？　だって、それは必要なくなかないわ。だって、畑の肥料になるでしょう？」

「廃墟に住んでた人間は、畑を作らない。他にも、新しいものが欲しくなると、まだ使えるものでもどんどん捨てていくんだって。捨てることが、捨てるほどたくさん物があるってことが、幸せだと思われてた時代があったって。だから、そこでは捨てることは悪いことじゃなかったんだ。そうして、みんなで捨てて捨ててゴミだけが

どんどん増えていった。ゴミを捨てるために木を切ったり、山を削ったり、川や海に捨てたりしたって聞いたよ。そんなの、誰も見たいって思わないだろ？」

「捨てるくらいなら最初から作らなければいいのに。でも、ますます変よ。だって、今はこんなに綺麗じゃない」

「ずっとドームの中にいたから、外が綺麗になってたってわかんなかったんじゃないかな。それに、時間が経てばこの風景だって見れないものになってくる。見れないものを急に目にしても、いいとは思えない。だから、誰も見なくなっただのかも」

「あたしが初めておじいちゃんを見て驚いたみたいに？」

「ああ。でも、マナはもうおじいちゃんを恐いとか思ったりしないだろ？」

「それどころか大好きになったわ」

「そういう気持ちを、きつとみんな持てなかったんだ。だから誰も外に出てこようとしなかったのさ」

哀しそうに、マナは頷いた。

「そうね。こんな綺麗な景色なのに。それを綺麗と感じられないのなら、それはとても悲しいことだわ」

空も雲も太陽も風も木も草も花も、マナにとっては全てが美しいかった。

「おじいちゃんの言ったとおりね。世界は、とても美しい色で溢れているわ。空も雲も土も草も花も、みんな美しい色で満ちている。ねえ、ユウ。あたしがドームの中で見たたくさんのもので、これほど美しいと思えるものはなかった。きっと、人間の作るどんな人工物も、自然の成し得る造形には適わないんだわ」

世界は美しい。

それに気づかずにいるのは、とても淋しく、虚しいことだ。

「人間って、あんまりいいことしてなかったのね」

「マナ？」

「だって、おじいちゃんも言ってたわ。この世界では、人間だけが異質なんだって。人間がたくさんいた頃は、世界はとても病んでいた。やがて、この地上から一人も人間がいなくなったとき、そのときこそ、世界は一番美しいだろうって。」

あたしたちって、本当はそんなに大事じゃないのよ。この世界にとっては、いなくてもいい存在なんじゃないかしら」

「そうかもな。でも、俺は、マナがいてくれてよかったよ。おじいちゃんがいてくれて幸せだった。マナはどう？」

「もちろん、あたしもよ。ユウとおじいちゃんがいてくれて、とても幸せよ」

「それでいいんじゃないかな」
「え？」

「世界にとって必要じゃなかったって、別にいいんだよ。自分が大事に思える人がいて、その人から大事に思ってもらえれば、それだけで、俺はいいと思うんだ」

「世界にとって、異質でも？」

「世界にとって、異質でも」

「他に何の意味もなくても？」

「他に何の意味もなくても」

マナはユウの答えに戸惑った。

「よく、わからないわ。だって、そんなこと言った人、誰もいないもの」

「マナ。別に、俺の考えが本当だとか、絶対だってことじゃないんだ。ただ、俺はそう思ってるって、それだけだ。マナが無理にそう思う必要はないんだ。俺もマナも、違う考え方をする。それと同じで、みんなが同じ考えじゃなくてもいいんだよ」

「本当？ 本当にそれでいいの？」

「だってマナ、ここに居るのは俺達だけだろ？ 他の誰の許しがないのさ」

「だって——」

ドームの話はしたくなかった。ユウがそれをいやがるのがわかっていたからだ。

「ここはドームじゃないよ」

だが、意外にもユウは笑っていた。

「ユウ？」

「ドームでは許されないことだって、ここにいればそんなの関係ない。ドームにはドームの考えやり方がある。ここでは、この考えやり方がある。おじいちゃんはその言うてくれたよ。俺はおじいちゃんの考え方ややり方が好きだ。だから、好きな方をとる。さ、もう帰ろう」

山を下りきるまで、二人は無言だった。ユウはユウで、マナはマナで、全く別のことを考えていた。次の会話までじつくりと自分の考えを整理してから再び唐突に会話をすることはよくあることだったので、二人は気にもとめていなかった。

「でも、ユウの考え方は、きっと博士は許さないんじゃないかしら」
そして、口火を切ったのは、マナの方だった。

「博士？」

「ええ。あたしを育ててくれた人よ。とても優しくて、素敵なの」
瞬間、ユウの表情が厳しく、険しいものになったことに、マナは気づいた。

「シイナか？」

「ええ、そうよ。どうして知ってるの？」

「シイナ——」

じっと空を睨んで、しばしのち、ユウは低く呟いた。

「あいつは、人殺しだ——」

その言葉に、マナは驚く。

「どういうこと？ 博士が、誰を殺したっていつの？」

「マナ、俺も三歳まであそこで暮らしてた」

「あそこって、ドームのこと？」

「ああ。そうだ」

「嘘、だって、あたしはユウを見たことないし、そんなこと聞いたことないわ」

「会ったとしても、小さかったし、覚えていないのかもしれない。あいつがマナに教えなかったのは当然だ。自分が殺した子供のことなんか、他人に話す訳がない。でも、俺は忘れない。あいつが俺にしたことを。決して――」

「嘘よ！ 博士は優しい人だもの、そんな、恐ろしいことできるわけないわ！！」

「あんたはあの女を知らないんだ」

「じゃあ、ユウは知ってるっていうの？ あたしはユウよりもずっと長く博士と一緒にいるのよ。あたしの知ってる博士は、そんなひどいところ一度も見せたことはなかったわ。どうしてそんなこと、信じられるって言うの！？」

次の瞬間、ボタンをひきちぎるようにユウは上衣を剥いだ。

「！？」

膚けた衣服の間から覗く右下腹部には、マナにはわからなかったが銃で撃たれた上に、化膿し、爛れたまま消えなくなった痣が、はつきりと現われていた。

「この傷を見ろ、あいつにやられたんだ。俺はまだ、生まれて三年しか経ってなかった。あいつは俺を外へ連れていった。ドームの外へ。初めて見る外の景色に喜んでた俺を、あいつは後ろから撃った。この傷を見ても、嘘だって言えるのか！？」

「――」

反論できなかった。わかるのだ。なぜわかるのかはわからないけれど、ユウの言葉は真実だ。それがわかっていているからこそ、信じたくなかった。

大好きなシイナ。

優しくて、綺麗で、何でも知っていて、何でもできる、大好きな彼女がそんな恐ろしいことをするなんて。他に何も考えられない。

ただ、苦しかった。

「――」

こぼれる涙をとめることはできなかった。

ユウはマナをじっと見つめていた。

「マナは何も知らないんだ。それはマナのせいじゃないけど……」

「――」

ユウはそのまま、一人で廃墟へと戻っていった。

「博士……嘘よね、そうよね……」

夕暮れが近づき、部屋の中が徐々に薄暗くなる。

しかし、マナは動かなかった。

控えめなノックの音にも、扉を開けて入ってきた老人にも、気づいてはいたが動けなかった。

「マナ。今度は一体どうしたんだね？」

自室の床に座り込んだまま、声をかけられてようやく振り返ったマナは、泣きはらして真っ赤になった目で老人を見上げた。

「おじいちゃ……」

声を出すと同時に、涙があふれる。

マナは老人にしがみついて声をあげて泣いた。

「ユウに聞いても何も答えんし。おまえさんはおまえさんで部屋を出てこんし。最近は喧嘩することもないから安心していたのに、よくもまあ、おまえさんたちは」

「だって、ユウが、ユウが……」

「ユウが何か、おまえさんに言ったのかい？」

マナの頭を優しく撫で、老人は問う。

「ユウが、博士に殺されそうになったって言ったの。でも、博士は優しい女なのよ。あたしを育ててくれたの。本当に、素敵な女なのよ。おじいちゃん、本当なの？ 博士が、ユウを殺そうとしたの？」

老人は一気にまくし立てたマナの言葉を理解すると、一瞬眉根をよせ、それから、首を振った。

「そのことなら、私には、わからんのだよ。実際にそれを見たわけではないからな」

老人はマナをベッドに座るよう促し、自分も彼女の隣に腰を下ろ

した。

「ユウを見つけたのは、私と死んだ妻だったんだよ。私達は、ここに住む前は、もつともつと南の方に住んでいたんだ。そう、もつとドームに近かった。

その日は仲間も含めて山菜を採っておこうと遠出をしたんだ。歩き疲れて川の近くで休もうと、私達は水音に従って川へと出た。しばらく休んでいると、妻が突然川へと入っていった。驚いてあとを追っていったら、岩の影に引掛かっただけで止まっていたユウを見つけたんだよ。

私達はすぐにユウを住処へ運び込んだ。幸い、弾は貫通していたが、医療設備などなきに等しい。応急処置と輸血だけで、あとはユウ自身の生命力にかけるしかなかった。幾日も高熱が続き、傷は塞がらずに膿を持ち、私達は何度も、あの子が死ぬのではないかと思った。ようやく熱がひいても、一月以上、ユウは言葉を話すことさえできなかった」

布ごしに触れた腕から、老人のやるせない痛みが伝わってくる。

強い感情や相手との接触は、マナに自分のものではない感覚を伝えてくる。ドームで暮らしていたときよりも、それは、今、確実に強くなっていた。

（でも、相手の気持ちがわかるのはいいことだわ。つらい時は、誰でも理解してほしいものだって、おじいちゃんが言っていたんだもの）

マナは老人の皺だらけの手をとり、優しく握った。

老人は目を細めてマナを見返した。

「ユウは我々よりもはるかに高い知能を持っている。そのせいかどうかはわからないが、あの子は三歳であったが、誰が、なぜ、自分を殺そうとしたのかすでに脳裏に焼き付けていたのだ。一月を過ぎて、あの子が初めて口にした言葉を、私は今でも覚えている。

『このままにはしない——』

私は、そこにいるのが本当に三歳の子供なのかと思ったよ」

「じゃあ、やっぱりユウ以外、犯人が誰かはわからないのね」

「問題は、誰がユウを殺そうとしたかではない。どうでもいい相手なら、ユウはきつとああまで思い詰めはしなかっただろう。

信じていた者の裏切り。それが、ユウの心に憎しみを植えつけたのだ。だからこそ、私は、あの子が憐れでならんのだよ」

老人は首を横に振り、忌まわしい回想を追い払うかのような仕草をした。

「ユウは心に傷を負ったまま成長した。今まで一緒に暮らしてきた私達の誰も、その傷を忘れさせることはできても、癒してやることはできなかった。

だが、マナ、私はおまえさんなら、ユウの受けた傷を癒してやるだろうと思つとるんだよ」

「あたしが？」

「私は、ユウがおまえさんをさらつてくることに反対はしたが、本気では止めなかった。

私はユウが可愛い。ずっとその成長を見守ってきた。

だが、私は確実にユウより先に死ぬ。だから、おまえさんに傍にいてやってほしいんだよ。おまえさんはユウと歳も近い。何よりユウが、一番にそれを望んでいる。

ユウは一人で生きられる能力を持っていながら、独りでは生きられない。ユウの受けた傷は、それほど深くユウの根本を抉ったのだ」

真摯な眼差しを、マナは戸惑いつつも受けとめた。

老人は本気だ。

本当に、マナがここにとどまることを望んでいる。

だが、それはできないことだ。

マナには使命がある。

それはマナの存在意義に等しい。

「——あたし、ユウのこと好きよ。おじいちゃんもよ」

後ろめたい気持ちを隠せないまま、マナは言葉を繋ぐ。

「でもね、あたしはフジオミの子を産まなきゃいけないのよ。だから、ずっとここにはいられない、と、思う……」

「それがおまえさんの意志なのかい、マナ？」

「え？」

顔を上げて老人を見つめるマナの瞳は、戸惑いの色を露にしていた。

「おまえさんは、他の誰に言われたのでもなく、自分の意志で、そのフジオミとかいう人の子供を産みたいのかい？」

真っすぐに見据える瞳に、ごまかしはきかない。

「——わからない。そんなの、考えたこともないわ。だって、そういわれて育ってきたんだもの。それが当たり前だって、思ってたんだもの。それじゃ、いけないの？」

「では、考えなさい。幸いここには考える時間だけはある。マナ、自分がどうしたいか考えるんだよ。他の誰に強要されることなく、自分の心で、見極めなさい」

老人の言葉は、それまでマナの考えもしなかったことを彼女自身に選択させようとしていた。

義務として、使命としてではなく、自分の意思で考える。

それは、マナにとってはとても難しいことだった。

少しずつ新しい世界——別の視点からの見識——を理解しているとはいえ、マナはまだ十四歳の子供に過ぎなかった。

（ここにいなさいって、言ってくれればいいのに）

ドームにいたときは、全てシイナがマナのすべきことを教えてくれていた。

マナはただ、彼女の言うとおりにすればよかった。

疑問さえ、抱いたことはなかった。それが正しいのだと、ずっと

思っていたからだ。

「おじいちゃん、あたし、間違ってたの？」

不安げに、マナは老人を仰いだ。

皺だらけの乾いた手がマナの瑞々しい若い手を取る。

「こんな世界だ。間違っていることが、悪いことだとは言えんよ。我々人間は、確かに選択を誤った。だが、今更それを否定できない。そのまま進むしかない。だからこそ、決断は自身でするのだ。自分が決断したことなら、その後悔ですら自分だけのものだ。誰かの所為にして生きても、それは本当に自分の生を生きたとは言えんのだよ」

シイナは長い廊下を歩き、カタオカの部屋へと向かっていた。オートドアには自由な入室を許可することを示す緑のライトが点いていた。そのまま部屋の前に立つと、すみやかにドアは左右へ開いた。「お呼びと聞きましたが」

「ああ。入りたまえ」

カタオカは議会の長でもある。その理由は彼が議員の中でも最年長者であるとともに、ていのいい周囲の責任転嫁でもあると、シイナは思っていた。

議員と呼ばれる者は、そのほとんどが四、五十代である。いま現在の人間の平均寿命は六十歳前後だ。

後は死を迎えるだけの人々は、全てにおいて希薄で、もはや己れの意志すら持っていないようにも思える。

実際、彼等にはどうでもいいことなのだ、この世界のことなど。

もはや己れの死にさえ関心を持たない彼等は、当然のようにマナのこともユウのこともフジオミのことも、未来のことさえ考えることを放棄している。

「シイナ、未だにマナはユウとともに外の世界で生存しているというのは本当なのかね？」

困惑すら見せない、静かで控えめな口調。

シイナはうんざりしていた。

「本当です。記録を見つけました。このドームへの移住し始めた頃にここを離れて外の世界へ出ていった人間がいたそうです。ここより北の廃墟群にかつての生活跡が見られました。かなり前のものなので、なんらかの理由により、そこからさらに北へ移住したと思われる。おそらく、ユウはその子孫である人間達に保護されたのでしょう」

「どうする気かね？」

「ユウを追います。マナを取り戻す、それだけです」

感情の起伏すら見せないシイナの口調に、カタオカは眉根を寄せた。

「君は一度彼を殺した。また、殺すのかね」

「生きているのなら、死ぬまで、何度でも。彼の能力は、私達には驚異です。私のミスでした。あのとき、私は彼の死体を確認しなかった——」

「愛情はなかったのかね、彼に対する」

「愛情？ 私に——？」

高らかに、シイナは嗤った。

「そんなものが、今の私達の中に存在すると、本当に思っているのですか？」

傑作だわ。そんなものを持ち得ない完全体であるあなたに、言われるなんて」

シイナは冷たく微笑った。本当に、美しい笑みでカタオカを見た。「私は失敗作ですよ。そんな感情など、持ち合わせているわけがない。あなたでさえ持たないものを、どうして私に持てるとお思いですか？」

「シイナ——」

「あなたに、愛するということがわかるのですか？ あなたとて、誰も愛さなかったくせに。全てを愛しているなんて、言わないでください。当の昔に私達から失われた感情について今更議論しても、何にもなりません」

「——君の考えていることが、私には理解できないのだ。私達とは違うものだからか？ 君の望みはなんだ？ なぜそんなに、君の意志は強い？ どうしてそんなに、私達と違うのだ——」

「あなたはもう、理解することさえ放棄してしまった。わからないのは当然です」

シイナは一礼してカタオカに背を向けた。

「シイナ、こだわりを捨てたまえ。もはや、誰もがわかつている」
その言葉に、シイナは立ち止まる。だが、振り返りはしない。

「我々の滅びは止められない。もう、どうあがいても無理なのだ――」

苛立ちに似た感情を、シイナは微かに顔に表した。
ゆっくりと振り返り、カタオカに視線を据える。

「あなた達は、あきらめたまま残る時を過ごせばいい。
何も残さず、意味もなく、死ぬまで生きればいい。

私は違う。

私はあきらめない。黙って、何も残さず生きたりしない。

それが例え気休めにしか過ぎなくても、私は自分の存在意義を見
つけだします。死ぬ最期の瞬間まで、あがき続ける――」

強い意志が、そこにはあった。

けれど、それは、カタオカにとって最も痛ましく思えるものだと
いうことを、彼女には理解できなかった。

「――シイナ、私は、君が憐れでならない」

だからこそ、こんな言葉にも、傷つきはしない。

「憐れみなら、いくらでもかけてください。今更遅かったなどと責
めたりはしません。

でもそれは、私にとってもう何の意味もない」

それ以上の言葉はなかった。

シイナは再び振り返ることはなかった。

そしてそのまま部屋を出た。

「――」

長い廊下を足早に歩きながら、シイナは堪えきれない怒りを感じていた。

くだらない不毛な会話を続けたことを後悔していた。
もはや話し合う価値さえないのに。

シイナはカタオカを尊敬していた。カタオカは、フジオミにもシイナにも分け隔てなく接してくれた。シイナには、生殖能力がなかったにもかかわらずだ。

だが、それは愛情からではない。ただ単に、どうしてもよかったのだ、彼にとっては。

だからこそ、あんな決定ができたのだ。

フジオミの発言を尊重しよう。シイナ、君は君の義務を果たしたまえ。

その時、シイナは自分を支えていた世界が壊れたのを知った。
愛されていると信じていた。

例え自分に、生殖能力がなくても。

だが、残ったのは屈辱と、嫌悪と、怒りと、絶望だけだ。

シイナ。私の決定は君をそんなに傷つけたのか。

あの日を境にすっかり変わってしまったシイナに、カタオカは苦しそうに尋ねた。

まるで、後悔でもするよう。

だが、もはやシイナには彼の贖罪など、どうしてもよいことだった。

壊れたものは戻らない。

優しい過去へは戻れない。

許してくれと言いたげなカタオカに冷たい一瞥をくれて、あの時

シイナは彼に背を向けた。

もはや彼に対しては、軽蔑しか持てなかったのだ。それなのに、フジオミのために自分を犠牲にしておいて、なぜそんなことが言えるのだ。

組み敷かれて恐怖に泣き叫んだあの時間を、踏み躪られズタズタにされた誇りを、自分は一生忘れないだろう。

忌まわしい過去が甦ってくる。

同時に、嫌悪が身を貫く。

嘔吐感に襲われ、シイナはきつく瞳を閉じた。

震える身体を必死に押さえつける。

あの過ぎてしまった時間を思い出す時、いつも身体が拒絶反応を起こす。それ以外は、フジオミに抱かれているときでさえ、こんなことは起こらないのに。

「――」

震えが徐々に収まるのを感じながら、シイナは改めて、今回の事件の元凶となったユウに対して、新たな怒りを感じた。あの時、きちんと殺してさえいれば、計画は順調だったのだ。

自分の失態だ――シイナはきつく拳を握った。

「何としても、マナは取り戻す。今度こそ殺してやるわ。死ぬまで、何度でも」

マナと会わない日が三日続いた。

彼は今、マナが唯一来ない地下にいた。いつものように。

この一年、日課となった作業を機械的にこなす。

体を動かしている間は何も考えなくてすむが、作業が終わればまた、現実を直視しなければならない。

必要な電源だけを残し、それ以外のすべてが消えていることを確かめると、ユウは部屋を出ようとして、ふと足を止めた。

ここから出たら、マナに会ってしまうかもしれない。

その時、自分は一体何を言えるだろう。

マナの前であんな風にシイナを非難したが、自分にその資格はあるのか。

自分だって、全てをマナに話しているわけではない。

こうして真実に触れる部分は隠したままだ。

全てを教えもせずに、マナに判断しろなどと、本来なら言える訳がないのだ。

マナが苦しいように、ユウもまた苦しかった。

マナを傷つきたいわけではなかった。

ただ、哀しいだけだ。哀しみだけが、日毎に強く、この胸を圧迫していくから。

時折、呼吸していることすら億劫になる。

今ここにいる自分が、嫌で嫌でたまらない。

許してほしいのに。

一番に誰よりも。

どんな愛でもいい。

必要としてほしい。

ここにいてもいいのだと言ってほしい。

望むのは間違いなのか。

愛されないから憎むのか。

シイナという女を、怒りなしに思い起すことは不可能だった。

だが、今ユウは怒りだけでない感情を、呼び起こさずにはいられなかった。

向けられた微笑みを。

あたたかな眼差しを。

優しく語られた言葉を。

もうとつくに忘れかけていたあたたかな感情まで甦るのは、苦痛に近い。

ユウは胸を押さえた。

あの頃は、全てを信じていられた。

世界は自分のためだけにあるように、幸福だった。

「――」

シイナの面影と、マナが重なった。

シイナのように、いつかマナも、自分から去る。

欲しいものは、決して得られない。

どうして、自分は――

ユウは顔を上げ、振り返り、ただ一点を凝視した。

「……………どうして」

決して彼を受け入れない、その姿を。

「教えてくれ。どうして、あんたのその目に、俺は映らないんだ。

生きているのに。触れられるのに。どうして俺だけを切り離すんだ

……………」

それは決して届かない、声だった。

地下室を出てから真っ直ぐ自室へ戻ったユウだが、気分が晴れずに外へと向かおうと部屋を出、階段を降りた。

「ユウ？」

階段の踊り場で呼び止められ、苦い思いで顔を上げる。

だが、今は誰とも話をしたくなかった。口を開けば、自分はまたマナにあたりちらすだろう。

ユウは黙って階段を下りて外へと向かった。

追いかけてくる足音が響く。

「ユウ、待つて。あなたに話があるのよ」

マナの声に、ユウは振り返った。

彼女は真っすぐにユウを見つめていた。

彼が戸惑いを覚えるほど一途に。

マナは階段を駆け下り、ユウの前に立った。

「ごめんなさい、ユウ。あなたのこと、疑ったりして。とても反省してるわ。」

でも、あたしは博士が好きなの。ユウを好きなのと同じくらい、博士もフジオミもおじいちゃんも好きなの。ユウは博士を好きなあたしを、許してはくれない？ やっぱり、一緒にいるの、いやかしら」

遮られるのを恐れるように、マナは一息に喋った。

「――」

ユウは遠い瞳で、マナを見ていた。

そのままマナを通り抜け、自分を動かすものに想いを馳せる。その感情がどういうものかは、自分からはあまりにも遠すぎて、理解することはできなかったけれど。

マナの意志は、もう揺らがない。

彼女は自分で考え、そして選んだのだ。

「シイナは、あんたに優しかった？」

穏やかなユウの問いに、マナはしっかりと頷いた。

「とても優しくったわ」

マナの気持ちは、マナだけのものだ。

自分の憎しみが、自分だけのものであるように。

ユウは、それを理解した。そして、受け入れた。

「それなら、いい。あんたはあんたが信じたいものを信じればいい。誰も、人の心に強制はできない。俺が憎む分、あんたは愛せばいい。俺が許さなくても、あんたが許せばきっとシイナは幸せになる」

不思議と、心は穏やかだった。

マナの瞳は、いつも迷わずに自分を見据える。

マナは、今ここにいる自分を、確かに見てくれる。

「マナ、あんたは強い女だ」

「強い？ あたしが？」

「ああ。とても、強い」

自分よりもずっと。

自分は一体、誰を見ているのだろう。

「俺はずっと、あんたに会いたかった。あんたが俺を知るずっと前から、俺はいつか、あんたに聞きたいと思っていたことがあったんだ」

「それは何？」

「もういいんだ。もう、どうでもいいことだから」

目の前のこの少女が愛しかった。

だがそれは、決して許されないものであることも知っていた。

「それでも、俺は、ずっとあんたに会いたかったんだ——」

もう何度も見直し、完璧に内容を覚えてしまった報告書に、シイナはもう一度目を通していた。

「――」

結果はどうあっても同じだった。

だからこそ、マナを育てたのだ。

未来のために。

ただそれだけのために。

「母体が、必要なのよ。完全な生殖能力を持つ女性体が――」
出来得る限りの精子と卵子は、凍結保存してあった。

だが、マナがいなければ、それも意味をなさない。

生殖能力を備えた子供の誕生には、その子を産む母親の存在が
要不可欠なのだ。

シイナはもう一度、書類に視線をやった。

唯一絶対の条件。

女性の体内で育てられること。

妊娠・分娩は母子ともに多大な負担をかける。よって、どちらにも安全な方法として科学技術の粋を懲らし、極めて完璧に近い人工子宮なるものまで作り上げた。

初めは、彼等も安心していただ。いつでも欲しいときに子供を得られるようになったのだから。そして、それにより結婚という概念も、彼等の意識の中では徐々に重要性を失くしていった。

誰でも、いつでも好きな時に子供を得られるのだ。精子か卵子、己れの持つものとは異なるとどちらかを提供してもらえれば。

しかし、世代を重ねる内に、人工子宮で育った子供はクローンで

あるなしに関わらず、肝心の生殖能力を持たなくなっていくた。

原因に気づくまでには、世界の人口は驚くほどに減っていたという。そこまで至って、ようやく彼等は自分達の現状に危機感を抱いたのだ。

このままでは、人類は滅んでしまうと。

今や人工子宮はクローニングにのみ使用される。

出来得る限りの技術を駆使して母体に近い環境を整えてものこの事実、一体何を意味するのだろうか。

やはり生命の領域は、人の手には負えぬ代物なのか。

「もつと母体がいれば――」

全てが枯渇してきている。

終末が、近づいている。

産まれない子供。

産まれない女。

本来、女兒のほうが生存率が高いはずなのに、産まれてもすぐに死んでしまう。

ようやく育っても、生殖能力をもたない女が多かった。

だが、それでも、子宮さえあれば、人工受精は可能なのだ。卵子も精子も、ストックはいくらでもある。

前世紀の人間達は愚かだったと、シイナは思った。

彼等の代なら、まだ未来を救うことは出来たはずだ。女性はまだたくさんいたのだから。

だが、彼女等は未来を考えなかった。

兆しはあつたろうに、未来を救うことを放棄した。

女達は、自分達の子供を産むことに、あくまでもこだわった。自分達に連なる子供を産むことにだ。その結果が、今の未来だ。

己れのエゴで、未来が滅ぶというのに、なぜ、誰も、強制的にでも彼女等を従わせなかったのか。

そして、そのつけを、なぜ、今自分達が支払わなければならないのだ。

わずかに血を繋いできた人間がこのドームで暮らしてきてからすでに2世紀が経とうとしていた。

いくら耐久性に優れていても、当時の科学力で造られたものでは年月には勝てない。

新たに造り出すには、人員も、技術も、資源も、少なすぎるのだ。

このままでは、半世紀も待たずに人間は滅びる。

いきつく思考に、シイナは身を震わせた。

「——いいえ。まだよ、まだだわ。まだ、私達は救われる。マナが、救ってくれる」

きつく、シイナは唇を噛みしめた。

「シイナに、会っているかね」

カタオカは独り言のように呟いた。背を預けた皮張りのソファーが、ぎしりと音をたてる。

「ええ。マナの居所がつかめないので少々焦っているようです」

カタオカと向かい合って座るフジオミは、グラスを口へ運んだ。

「マナ——か。いくつだったろうか、その子は」

「十四です。もう五年もすれば、ユカのように美しい娘になるでしょう」

「ユカ——そうか、彼女が死んで、もう十四年も経ったのか……」

ユカは、カタオカの伴侶であった女が産んだ子供だった。もちろん彼の子供ではない。

子供の産まれにくいこの社会では、いつしか一妻多夫制を取り入れていた。

身体の弱かった妻は、二人目の子を産むとすぐに亡くなった。

それがツシマとサカキの血を引くマサトとユカの兄妹だ。

カタオカ自身は、自分の子供をとうとうその腕に抱くことはなかった。

ユカは何度も身籠ったが、そのほとんどは流産であった。

生殖能力があり、妊娠することができなのに、なぜか育たない子供達。

その度に衰えていく彼女の身体。

カタオカはユカに数えるほどしか会っていなかった。彼女自身に、興味すらなかった。

妊娠、出産は、多大な疲労を、肉体とその精神にかける。

子供を産むためのだけの道具のように扱われる彼女。

そのためにユカは複数の夫を持っていた。

それでも、彼女はそれを不満に思うことさえないようだった。

未来のために。

誰もが口をそろえて言う。

その内の一人に、かつては自分も入っていた。

若かった自分は未来を考えながら、その実何も理解してはいなかったのだと苦々しく思い知る。

現実を見るがいい。

（未来など、何処にある——？）

彼女を、シイナを、マナを、女達を犠牲にしてまで繋ぐ未来に、何の価値があったというのだろう。

いきつく先は、すでに決まっていたことだったのに。

それはすでに、同胞達にも、考えればわかる簡単なことだったのだ。そう。考えさえ、していれば。

自分達は、どこかで何かを間違った。

今になつてそれに気づく自身の愚かさを、カタオカは自嘲した。

「カタオカ？」

「いや、すまない。考え事を、していてね。もし計画が失敗しても私は別にもう、どうでもいいのだがね。シイナには聞き入れてもらえなかったが」

「シイナにも、本当はそんなことはどうでもいいんですよ。彼女に必要なのは、自分に何ができるかということです」

そして、フジオミから逃れること。

マナがいれば、彼女はフジオミから自由になれる。

フジオミ自身それに気づいていた。が、別段気にも止めなかった。自分が満たされていれば、相手などマナでもシイナでも変わらないと思えた。

「フジオミ、君は自分の立場をどう認識している？ その義務を、どう考えているんだね？」

カタオカにとって、それは真摯な問いであつた。だが、フジオミには愚問だつた。

なりたくてなつたわけではなかった。

ただ生まれたときから、決められていただけだ。

全てが自分の意志ではどうにもならないことだつたから、彼にとつては全てがどうでもいいことだつた。その点では、フジオミもまた、マナと同じく『自身』を持たない人形に過ぎなかった。

「僕には何も考えることなどありませんよ。義務は果たしましょう。ですが、それ以上を望まないでください。望まれても、僕には期待に応えるだけの気力も情熱もありはしないんです。

あなた達が、僕等をそう造つた。ならばあなた達もそれ以外を考えるのはやめてください。今更後悔されても、何にもならない。

中途半端な優しさを見せるより、彼女を殺してでも止めてやった方がいいですか。それさえもできないのなら、見え透いた偽善を振

りかざすのもやめるべきです」

「――」

黙り込むカタオカを、フジオミは憐れにも思う。確かに彼はシイナを傷つけただろう。義務を優先して、その信頼を裏切ったのだから。

だが、彼だけを責められようか。

カタオカもまた、自分達と同じに義務を強いられた人間であるに過ぎないのだ。

「すみません。言いすぎました」

「いや。いいんだ」

大きな吐息をついて、カタオカは首を振った。

「実際、我々は袋小路に追い詰められている鼠のようなものだ。マナと君の子供が産まれれば、それで最後だ。それ以上増えることはないだろう。そして、マナにも正常な子供が産めるとは思えない。ユカがいい前例だ。今更過ちを繰り返すつもりはない。いずれ終わるなら、今終わらせても、大して変わりはないとも思えるのだよ」

「シイナにとっては、もっと前に言っただけだった言葉ですね。なぜ、今更それを僕に言うんですか」

「あの頃は、私もまだ、ありえない可能性に縋っていたんだよ。そして、シイナを傷つけた。私は後悔しているんだよ。君のために、シイナを犠牲にしたような結果になったことを」

フジオミは大して気にした風もなく肩を竦めた。

「正直、僕には全てがどうでもいいことなんです。シイナのように何かに情熱をそそぐ対象もないですね。僕はただ――」

「ただ、何だね」

「したいことのある人間がいるなら、そちらを優先させてやったほうがいいと思っただけです。そんな風に何かに夢中になれるなんて、尊敬に値しますからね」

「だが、シイナの情熱は危険だ。すでに一度、殺人まで犯しかけている。生命の尊さを、彼女は真に理解していない。生命の重さはみ

んな同じだ。例え、それがどんな生命でも」

フジオミはカタオカの言葉に、純粹に驚いた。彼の口から、生命の尊厳を聞こうとは思ってもいなかったのだ。

「平気でクローニングを繰り返してきたあなたとは思えない言葉だ」
フジオミの揶揄に、カタオカは表情を強ばらせた。誰にでも触れられたくない部分はある。痛みを伴う後悔であるなら、それは尚更だ。

カタオカは強ばった口調で告げる。

「私が常に平静であつたと、信じたいのならそうすればいい。だが、問題は私ではない。

シイナだ。彼女を、止めなければ――」

「止められますか、あなたに」

「いいや。できないだろう。シイナは二度と、私に心を開くまい。

私は彼女の信頼を裏切つた。君では、止められないかね」

「できません。信頼を裏切つた点では、僕も共犯でしょう。僕等は彼女に義務を強いた。それを続ける以上、それ以外で彼女を拘束することはできませんね」

シイナの面影が脳裏をよぎる。

フジオミの知っているシイナは、いつも怒りと嫌悪しか彼に向けない。フジオミの方は、いつもそれを興味深く観察していた。シイナを見ていると飽きなかったのだ。

あの決して殺せない情熱は、一体何処から生まれるのだろう。同世代で生まれていながら、この違いは一体何なのだろう。

フジオミにはわからなかった。彼等の立場が、その魂の形成を大きく変えてしまっていたことを。

選ばれた者と、選ばれなかった者との。

「――彼女を、自由にやってはいけないかね？」

カタオカの思いがけない言葉に、フジオミは我に返る。

「すみません。今なんと？」

「シイナを、自由にしてやってはどうだろう」

ためらいがちなカタオカは断定を避けてはいるが、フジオミにはそれが明白だ。

自分から、彼女を自由にしてやってくれとカタオカは頼んでいるのだ。

随分虫のいい話ではないか。今更。

「では、マナを見つけてください。マナがいるなら、シイナはいりません。いつでも自由にしてやっていい」

「フジオミ——」

「それができないなら、お断わりです。あなたと同じように僕だって自分が大事だ。見返りもないのに奉仕なんてできませんよ」

その日の午後、珍しく部屋にいなかった老人を探して外に出たマナは、廃墟の北の少し離れたところに、不思議なものを見つけた。草を隔てて剥出しになった土が広がっている。均等な間隔に、おびただしい数で土が盛り上がっている。そこに何かを隠しているように。

その小さな山の上には、がっしりした木が立ってある。その木の全てを、マナはすぐに数えることはできなかった。あまりにも数が多すぎて。

よく見ると、立てられた木には新しいものもあれば、朽ちかけてぼろぼろのものもあった。

老人は手前の方の、まだ新しい木の前に立っていた。そこには、草に混じって、可愛い小さい白い花が疎らに咲いていた。

マナは静かに老人に近づいた。だが、声はかけなかった。老人は静かに瞳を伏せて両手をあわせ、そのまましばらく動かなかった。

「おじいちゃん。ここは何？」

だいぶ待って、痺れを切らしたマナが問う。

老人がマナに視線を向けた。

「墓だよ」

静かな声が、淋しげに響いた。

「はか——？」

「そう。みな、私をおいて死んでしまった。彼等は、ここに眠っている」

「死んだ人を、土の中に埋めるの？」

非難めいた声音に、老人は穏やかに微笑って振り返った。

「そうだよ。それこそが連鎖というものなんだよ、マナ。我々はあらゆるものを殺して食している。だから、死ぬときが来たら、私達

は今まで奪ってきたものを還さなくてはならないんだ」

「還すって、どうするの？ 死んでからどうやって還せるの？」

「私達が、唯一所有できるもの、肉体を、土に還すんだよ。死ねば身体は腐敗する。それがよい土壌を育て、そこに新しい生命の誕生を齎らすんだ。」

ここに眠る彼等は、土に還ったのだ。土と同化して新たな命を産み出し、自らもやがて新たな命となる。それこそが自然の理だ。全てが等しく循環することが。だが、一時、人間はそれを放棄したんだよ」

「どうやって？」

「体を、焼いたのさ。焼いて、石の囲いの中に閉じこめた。思えばその頃から、人間はおかしくなりはじめたのかも知れん」

憂えた瞳で、老人は遠くを見つめていた。

「大地には浄化作用がある。形あるものを分解し、己れに取り込み、一部として、もう一度新たなものに産み出す。全ての命を再生する、そんなことができるのも大地だけだ。人間は、それを忘れてはいけなかった」

老人は、その時初めて、マナを振り返った。そして深い感慨をこめた眼差しで彼女を見つめた。

「マナ。全てのことには、意味があるのだ。それが何なのかを探すのが、人間の生きるということだ。この世界で意味のないものは何もない。全ての生命に、意味があるのだよ。そう、死ぬまで、いや、死んでも——」

「死んだら、それで終わりでしょう？」

不思議そうに、マナが首を傾げる。

「ある意味では、それが正しい。だが、昔、人は死んでも魂は残るのだという思想があったんだよ」

「ユウに前に聞いたわ。あの西の山は、魂が行く場所だって。レイジョウっていうんでしょう？ 魂って、あたしたちの意識なんですよ」

「ああ。魂とは、人間の核とも言えるものだ。そう、例えるなら、我々は肉体という入れ物の中に閉じこめられた意識であるということだ。だから、肉体が生きている間は、それが自分だと錯覚する。だが、肉体が死ねば、魂は解き放たれる。痛みもなく、哀しみもなく、苦しみもない彼方へ」

「かなたって？ 魂は、何処にいくの？」

「さあ、それは何処か私にもわからない。まだ死んだことはないからなあ」

「死んだことないのに、どうして魂がどこかにいくなんてわかるの？」

「信じているんだよ。死で全てが終わるなんて、あんまりいい考えとは思えないからね。そういえば、古い宗教には生まれ変わりの思想もあつたそうだが――」

「おじいちゃん、宗教って何？」

「私にも、よくはわからんがね、ある特定の、神、または特別な人間の思想を信じることだそうだ。いわゆる、人の心の支えとなったものか」

「神って言うのは？」

「人間ではないもの、我々を、いや、我々だけでなく、この世界全てを創つたもののことをそう呼ぶのだ」

マナは眉根を寄せた。

この神という概念を、彼女は理解できなかった。

マナの知識の中に、神というものはない。宇宙、地球、生命の誕生、それら全てはディスクの中で見聞きしただけのことで完結していたからだ。

シイナは、マナに倫理や哲学という抽象的な精神世界に関することを教えなかった。非科学的なものを全て排除したのだ。

そんな彼女の表情から、老人は簡単に付け加えてやった。

「要するにだ、我々普通の人間とは違い、できないことを全てできるものことだ」

「じゃあ、ユウだわ！　ユウが神なんだわ、ユウはあたしたちと全然違う。なんでもできるし、髪も目も、色が違うわ」

老人は苦笑した。

「ユウは人間だよ。あの髪と目の色は——そう、生まれたときからの病気なのだ。血が近すぎるために起こる」

「血が近いって、どういうこと？」

「マナと同じ血を持つもの。例えば、マナの母親、父親、マナの母親から産まれたマナの兄妹、マナの両親の兄妹、その子供達。これらはみんなマナと同じ血を持つ。近親者、または血族ともいう。血族同士婚姻を結ぶことで起きやすい遺伝病、これは身体のメラニンという色素が欠乏して、黒い組織をつくれなくなるというものだ。だから髪と目、肌の色が薄く赤くなってしまう」

「じゃあ、ユウのあの力は？」

「それは私にもわからん。あれもまた濃すぎる血が要因なのか」

「ドームには、ユウみたいな人はいなかったわ。血が濃すぎるというのは、いけないことなの？」

「血族結婚は古い時代からの禁忌とされてきた。不妊や障害、遺伝病など、さまざまな弊害が現われるからだ」

「ああ。わかるわ。ドームにはクローンがたくさんいるけど、クローンはみんな子供を作れないもの。それに、クローンなんて与えられたことしかできないの」

マナの無邪気な口調に密かな侮蔑が含まれていることを悟り、老人はゆっくりと首を振った。

「マナ、そんなふうに言っではいけない」

厳しい口調に、マナはにわかに怯えた。

「おじいちゃん？」

「マナ、おまえさんは優しい子だが、知らなすぎる。この世界に生きているものは全て慈しむべきもの、慈しまれるべきものなのだ。

生命とは、そこに貴賤を見いだすものではない。みな平等に尊いものなのだ。例えばそれが、自然の理に反するものであっても」

マナはまた、混乱した。そんなことを、シイナは教えなかった。クローンは、知能のレベルも高くなく、人間としても扱われていない。自分達とは違うのだと、以前自分に言っただ。そのことを老人に語ると、老人は小さく笑った。

「では、おまえさんは、自分とは違うユウや私を、生きる値打ちのないものだと思っのかい？」

「そんなー！ 一度も考えたことないわ、そんなこと。あたしは、ユウもおじいちゃんも大好きなもの」

「では、その気持ちを他のものにも向けておあげ。誰しも、望んでそうと生まれることはできないのだよ。そして、それは誰の所為でもない。」

望んだものになれなかったことを苦しむものは多い。それを蔑んではいけない。その傷を、理解しようと努めなければならないのだよ」

「ええ、そうね。ごめんなさい、おじいちゃん。あたし、いけないことを言っただわ。おじいちゃんやユウを蔑んだりするつもりはなかったのよ」

「わかってるよ、マナ。おまえさんはずっと、そう教えられてきたのだから無理もないね。ただ、これから知ってほしいのだよ。この世界に生きる全てのものの美しさと、かけがえのなさを。」

この世界は、全てが愛おしい存在で満ちている。今ここにこうして立って呼吸をしていること、それだけで、私は本当に生きていることがすばらしいと思うのだよ」

「知りたいわ、あたしも」

憧憬の眼差しで、マナは老人を仰いだ。

「どうして、おじいちゃんの考えていることは、こんなにあたしと違うのかしら。あたしは、今まで呼吸することの意味を感じたことはなかった。それがどんなに大切なことなのかも。教えられなきゃ、わからないものなの？」

「そうだね。自分で気づける人もいるが、マナ、私も教えてもらっ

たんだよ。母にね」

「母—— お母さん　ね！！　教えて、おじいちゃん。お母さんて、どんな人？」

マナは老人の衣服の袖を握り、話をせがんだ。老人はそんなマナに優しく語りかける。「そうだなあ。とても、落ち着いていて、静かで、いつも母からはいい匂いがしていたのを憶えているよ。優しく、私をとて愛してくれた。時には厳しく、叱つてもくれた。

一度、私が——そう、おまえさんよりもまだ小さいとき、母のいつけを破つて、夜、外に出たことがあつたんだよ。幸い何事もなく戻ってきたが、そのとき初めてぶたれたんだ。そして、その後彼女は私を抱きしめて泣きだした。本当に彼女は私を愛してくれた。

ああ。懐かしいね。本当に、とても、懐かしいよ。彼女に会いたい。話したいことがたくさんあるのに」

「いいわね。おじいちゃんには、お母さんがいて。あたしにはいないわ。あたしのお母さんて、どんな人だったのかしら。おじいちゃんのお母さんみたいに、優しい人だったのかしら」

「きつとそうだよ。子供を愛さない母親はいないからね」

「本当？　みんなそうなの？　あたしがおじいちゃんを好きみたいな気持ちなの？」

「そう、そして私がおまえさんとユウを思う気持ちと同じものだ」
触れた手から感じる暖かな感情に、マナは安堵した。老人は、マナを愛してくれている。それがわかるのはとても嬉しかった。

「親が子を愛するということは、自分を愛するのと似ている。自分から分かった一部だから、きつと切り離して考えるのは難しいのだろう。だが、それは決してそれ以上であつてはならないのだ」

「それ以上って？」

「母と息子。父と娘。彼らは最も惹かれあつてはならない存在だ。何故なら彼らは最も濃い血を、その身に有しているのだから」

「ああ。つまり、　伴侶　としてはいけないってことなんでしょう？　それに、歳も離れすぎているもの、無理があるわ」

「マナは何にでも興味をもつ。ユウ以上だ」

老人が笑う。だが、マナは当然のように頷いた。

「だって、あたしは何も知らなかったのよ。ドームで教えてくれたことも大事だけど、それはほんの少しだわ。あたしは知りたいのもつともつと、たくさん、いろんなことを」

マナは老人の腕にぐつとしがみついた。

「おじいちゃんは好きよ。あたしに色々なことを教えてくれるもの。あたし、ここに来てよかった。そうじゃなかったら、何にも知らないまま、博士に言われるままだったかも知れないもの」

老人を見上げると、皺深い顔が静かに微笑んでいた。

「あたしね、考えてるの。まだ決められないけど、おじいちゃんのこと、きちんと考えてるのよ。自分がどうしたいのか。」

でも、それを決めるには、あたしまだ何も知らなすぎるの。だから、決めるためにも、もつともつというんなことを知りたいの」

驚いたことに、少しずつ、マナは人形から脱し始めていた。自己を確立し、学び始めている。その成果は恐るべき速さでなされているのだが、それにつれて、マナの心には同時に不安が芽生えていく。「どうして博士は、あたしに何も教えてくれなかったのかしら」

次の日もマナは老人とともに時間を過ごしていた。ユウはいつも食事が終わると約束のように地下に姿を消す。

マナはそれを、今でもずっと不思議に思っていたのだが、やはり口にすることはなかった。それに、ユウのいない間に老人の話を聞くことが、マナにとっては楽しみになっていたからだ。

「今日は、海の話しよう」

「うみ？」

「そう。この地球の表面の大部分を占める太古からの水だ」

「知ってるわ。塩分を多量に含んでいるんでしょ？ だから塩辛いつて。青いのよね？」

「ああ。とても美しい色をしているよ。マナにも見せたいね。あの美しい海の色を」

マナを見ていながら、老人の瞳は、どこか別の——そう、マナのまだ見たことのない海を見ているのだろう。老人はマナに話して聞かせるとき、よくそんな遠い瞳をするのだ。

マナは正直、それが羨ましかった。

老人の感情を読むことはできるが、見えないものを見ることはできなかつたからだ。

「初めて地を覆う濃く青い水を目のあたりにしたとき、涙が出たよ。こんなにもすばらしい光景が、あっていいものかと。」

私達の住む星の、なんと美しいことか。

よせてはかえす波のさざめきが、どこまでも続く海。わたる風さえ、命の鼓動をはらんでいた。私の生涯の中で、あれほど美しいものを見ることは、きつともうないだろうなあ」

食い入るように見つめているマナに気づいて、老人はそっと笑ってマナの頭を撫でた。

「今度、ユウに連れていってもらうといい。あの子の力ならば、すぐだ」

「本当？」

「ああ。きつとマナも感動するよ。涙が出るほど、綺麗だと思うさ」
「だといいんだけど」

マナは正直言って、そのように感じられるか自信がなかった。

老人の目と自分の目は、いつもどこかが違うのだと思えてなかった。

遠い瞳をして、そこにはないものをとても幸せそうに見る老人の目は、きつと、自分とは比べものにならないほど美しいものを感じられるのだと。

「マナ、ユウを頼むよ」

「？」

「あの子は、きつとおまえさんのためなら何でもしてくれる。どんな願いも、叶えようとするだろう。私から言うのも何だが、おまえさんを、この世界の何よりも大事に思っている。それを、忘れないでくれ」

その言葉に、何故かマナは不安なものを感じとった。

「どうしたの、おじいちゃん？ 急にそんなこと言いだして。何だかもう会えない、何処か遠くへ行くみたいに」

「おや、そんなふうに聞こえたかね？」

「ええ。嫌だわ、おじいちゃん。そんなこと冗談でも言わないで。あたしたちをおいて、何処へも行かないでね」

「どうやら、マナにいらぬ心配をさせてしまったようだ。さあ、中へ入ろう。もう日があんなに高い」

老人は杖を持ちなおし、開いているほうの手でマナの肩に触れた。その足取りが、何だかいつもより重そうに見えた。

「ああ。きつともうすぐ……」

一歩一歩、ゆっくりと前に進みながら、遠くを見つめて、老人は呟いた。

それが一体何を意味するのか、マナはまだ知らなかった。

その日に限って、老人はいつまでも部屋から出てはこなかった。

「ユウ、おじいちゃんどうしたのかしら。いつもなら、とつくに起きてくるはずなのに」

「起こしてくる。マナはここにいて」

ユウが老人の部屋へと走っていく。

マナは自分の席につき、湯気のアがる朝食を見つめていた。
しばしのち。

マナ！！

「！？」

突然、ユウの声が脳裏に響いた。触れてもいないのに伝わってくる強い感情。こんなことは初めてだ。

「ユウ！！」

いやな予感がする。マナは食堂を出、老人の部屋へ急いだ。扉は開いたままだ。中へ駆け込む。

「おじいちゃん、ユウ！！」

ユウは老人を抱き上げ、ベッドへと運んでいる途中だった。

「おじいちゃん、どうしたの？」

「倒れたんだ。マナ、薬を。いつものやつでいいから」

「ええ」

ベッドの脇に落ちていた錠剤を、マナは拾いあげた。備え付けのバスルームに行き、グラスに水を入れ、戻ってくる。

ユウは老人の背中を支えて起こしてやると、薬を口に入れてやった。グラスを口に運び、ゆっくりと傾けると、老人は静かにそれを飲んだ。

「おじいちゃん、大丈夫？」

マナが心配そうに問うと、老人は安心させるように笑った。

「……ああ、大丈夫。少し、目眩がしてね。薬を飲んだから、もう落ち着くだろう……」

だが、老人の顔は血の気が引いて、病的に白くなっている。

「何か食べないと」

「ああ、では何か温かいスープでももらえるかい？」

「ええ。すぐ温めて持ってくるから、待ってて」

マナは急いで部屋を出ていった。食堂へと向かう足音が、老人の部屋まで微かに届いていた。

「——その時が、来たの？」

老人に視線を向けずに、小さくささやきが洩れた。

立ったままのユウを見、老人は椅子に座るよう促した。

「ああ、そろそろ、いかねばならんようだ」

「おじいちゃん——」

「わしがいなくなっても大丈夫かい……？」

血の気のない渴いた指が、椅子に座ったユウのそれに重なる。ユウは取り乱したりせず、落ち着いていた。

「——大丈夫だよ。わかってたから。何も心配ない」

「そうか……」

老人は悼ましげにユウを見つめた。まるで苦痛を堪えるかのように。

「おじいちゃん？」

「——おまえは、いつも哀しみを内に閉じこめてしまう。私達は、おまえに、心をそのまま伝えるということを、教え忘れてしまったのかもしれないなあ。

でも、ここにはマナはいない。私達だけだ。心をそのまま表してもいいんだよ」

ユウが困惑したように老人を見る。

「どうしてそんなことを？」

「おまえが、とても可哀相に見えるからだよ。いつも、決して手に入らないものを求めすぎているように、とても可哀相に見える」

老人の言葉に、ユウは一瞬目を睨り、それから痛みをこらえるように、一度ぎゅっとかたく目を閉じた。

「ユウ——」

「おじいちゃんの言うとおりだ。俺には、何も手に入らない。いつでも、俺は独りだ」

老人はかすかに首を振る。

「独りではないよ。おまえは、決して独りではない」

「——だって、おじいちゃんは逝ってしまうじゃないか。どんなに俺が頼んでも、みんな先に逝ってしまうじゃないか!!」

「ユウ——」

「いつだって、俺は独りだ。みんな俺から離れていく」

涙の伝うユウの頬を、老人は引き寄せ、横たわったままの胸に抱いた。

「ユウ。私が死んでも、おまえは独りにはならない。マナがいるよ。あの子が、おまえの傍にいてくれる」

ユウはかすかに首を振る。

「——マナだって、いなくなる」

「いいや。マナはおまえを選ぶよ。きつとずっと、マナはおまえといてくれる。私達が与えてやれなかったものを、マナが、おまえに惜しみなく与えてくれるだろう——」

マナが部屋にいても、老人は眠っていることのほうが多くなった。起きていても呼吸が荒く苦しそうに見える。

量が増える薬は、老人の体力を奪わないように深い眠りを与えてしまうのだ。

「おじいちゃん、いつになったらよくなるの？ あたし、何かでき

ない？　どうしたら苦しいのがなくなるの？」

珍しく起きていても楽そうに見える老人に、マナは問うた。

「ありがとう、マナ。でも、これはもう治らないんだよ」

「どうして？　病気なんでしょ？　だったら原因がわかれば治せるはずだわ」

「マナ、これは病気ではないんだ。寿命なんだよ。年をとりすぎて、命がつきるんだ。死ぬんだよ、もうすぐね」

穏やかな口調にそぐわない内容だった。

マナはじつと老人を見つめていた。老人は横になったまま顔だけをマナに向けていた。

「――死ぬって、どういうこと…？」

聞きたくないように、小さな声だった。わかっているのに、何だかそれはまだマナにとって理解できるものではなかった。

生命活動が停止すること。それが死。

知識としてはわかる。だが、それが自分にとってどのような作用を及ぼすのか、見当もつかなかった。

「もう二度とこの目を開けないということだよ。もう二度とユウやおまえさんとこんなふうには話せないということだよ。」

死とは、永遠の解放でありながら、時には残酷だ。愛しいものの永遠の別れも、確かにそこには在るのだから」

「いや……」

マナは首を振った。

「マナ」

「いや、そんなのいや」

マナは老人の死という言葉にわかに理解した。もう会えなくなるのだ。もう、話せない。この瞳が、マナがあんなに憧れた美しい思い出を遠い眼差しで見ることがなくなるのだ。それは想像でも耐えられないことだ。

「おじいちゃん、いやよ。どこにも行かないで」

涙が、マナの頬をとめどなく流れる。

「マナ、哀しんではいけない。残される者の哀しみが強いと、死んだ者は心安らかにはなれない。いつまでもそこにとどまり、安らぎの場所に向かえなくなるんだよ——」

「そんなのわからない。あたしたちをおいていくの？　ここにあたしとユウを残して逝ってしまうんでしょ？　そんなのいやなもの」
溢れる思いを止めることはできなかった。

今、老人が死を迎えようとしている。彼女の大好きな老人が、死ぬとしていているのだ。

「いや、いや、おじいちゃん。死んじやいやよ。何でもするから、お願い、死なないで」

「マナ……」

「嘘でしょう、おじいちゃん。何処にもいかないで」

涙に濡れるマナの頬に、老人はそつと手を伸ばした。だが、その手は震えていた。挙げることさえ、もうやっとなのだということが、マナにさらなる恐怖を与える。

「マナ。自分が何であるのかを見極めるのだ。生きていること、今ここに在ることだけでは、意味はない。意味とは、自分が決めるもの。自分で見いだすもの。それがあれば、どんなになっても、きつと生きていることは素晴らしいと思える。

私は幸せだったよ。とても素晴らしい人生だった——たくさんの仲間達と、そしておまえさんたちとすごせて、本当に、良かった」

老人の呼吸が、浅く、速くなっていく。

「おじいちゃん！？」

震える老人の手を、マナは必死で握った。少しでも震えを止めた。そうしないと、存在がすりぬけていってしまいそうに思えた。

「マナ。おまえさんはいいい子だ。本当に、いい子だ。おまえさんとユウは、私の生涯の中で、一番あざやかな色だった——」

老人は、マナの背後にじっと立ち尽くすユウを見た。

「おじいちゃん……」

「ユウ。マナを守りなさい。全ての苦しみと哀しみから、マナを守るのだ。それができれば、おまえも幸せになれる。きっと」

「おじいちゃん、でも、俺は——」

「幸せになりなさい。二人とも——」

静かに、老人は目を閉じた。

それきり、動かなかった。

「おじい、ちゃん……？」

答える声は、永遠に失われていた。

「いや……」

永い凍えた沈黙の後、マナの声がかすれて漏れた。

「いやよ、こんなのいや。おじいちゃん、目を開けてよ。ねえ、起きて。約束したじゃない。もっとたくさん、いろんな話をしてくれるって言ったじゃない——」

「マナ」

「いやよ、いやあつ——」

「マナ——」

ユウがマナを強く抱きしめた。その瞬間、混乱したマナの中に、自分のものではない、もつと強く、もつと深い哀しみが入り込んできた。息がつまる、激しく、心の中だけで渦をまく感情の嵐。

こんなに深い哀しみを知らない。

こんな哀しみを、自分は持てない。

これは、ユウのものだ。

「マナ、仕方ないんだよ。おじいちゃんはもう、十分生きたんだ。人間は、いつか死ぬんだ。おじいちゃんにも、その時が来ただけなんだよ」

マナは顔をあげ、そう言うユウを見つめた。

彼は、何処か虚ろにも思えた。

マナはユウの背に手を回し、しっかりと彼を抱きしめた。

「ユウも泣きたいのね。泣いてもいいわ。一緒に、泣きましよう。

そうしないと、ユウのほうが、壊れちゃうわ」

「――」

「苦しいの。これから、どうすればいいの。大好きだったのに。ずっと一緒にいたかったのに」

マナは肩に、ユウの熱を感じた。押しつけるようにマナの肩に額をあて、彼はずっと黙っていた。

それでも、ユウは泣かなかった。泣けなかった。

深く激しく、その心の内は泣き叫んでいるのがわかるのに、その感情は、決して表には出てこない。

冷たい壁に押さえつけられているように、ユウはただ黙ってマナを抱きしめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9709z/>

ETERNAL CHILDREN ～永遠の子供達～

2012年1月1日22時48分発行